

暑中お見舞い申し上げます

公益社団法人 隊友会

会長 藤縄祐爾

理事長 折木良一

常務理事 増田好平

常務理事 吉川榮治

常務理事 片岡晴彦

常務執行役 田中敏明

(総務担当) 植木美知男

事務局長 志摩篤

公益財団法人 偕行社

会長 富澤暉

相談役 森勉

理事長 深山明敏

副理事長 熊谷猛

副理事長 白石一郎

専務理事 奥村快也

事務局長 山越孝雄

公益財団法人 水交会

会長 齋藤隆

副会長 吉川榮治

理事長 赤星慶治

専務理事 杉本正彦

事務局長 長谷川洋

航空自衛隊退職者団体

つばさ会

会長 片岡晴彦

副会長 片山隆仁

副会長 溝口博伸

副会長 戸田眞一郎

副会長 齊藤治和

専務理事 藤田信之

若林秀夫

公益財団法人 大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

会長 島村宜伸

理事長 山下輝男

専務理事 伊藤隆生

常務理事 國澤輝生

東郷神社 宮司 福田勉

東郷会 会長 友國八郎

副会長 田内浩

理事長 伊藤和雄

編集長 足立晴夫

事務局長 足立晴夫

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

会長 杉山蕃

理事長 藤田幸生

副理事長 岩崎茂

専務理事兼 事務局長 石井光政

理事 白田智子

小倉利之

水町博勝

鮎田英一

大穂園井

岡部俊哉

阿部軍喜

羽瀨徹也

監事

巻頭言

副理事長 岩崎 茂

特攻隊戦没者慰霊顕彰会（以降「特攻
顕彰会」と言う）の機関誌であるこの

「特攻」の巻頭言に初めて寄稿致します。
私は、特攻顕彰会副理事長を務めてお
ります岩崎です。私は、特攻顕彰会では
副理事長の職とともに機関誌「特攻」の
編集委員長の役割と特攻顕彰会の各種事
業を推進するための「全体委員会」の委
員長としての役割も担っております。

まず、はじめに皆様方には日頃から特
攻顕彰会に対しますご理解・ご協力・ご
支援、そして叱咤激励を頂いております
事に心から感謝・御礼申し上げます。私
はこの特攻顕彰会には、自衛隊を退官し
た後の平成26年（2014年）10月から
入会させて頂きましたので、今年で5年
目です。全国各地での特攻慰霊祭等に参
加し、特攻に関する研修会等で各地の特
攻に所縁のある場所を訪ね、特攻隊員の
思いの一端に触れ、若い世代の方々にも
彼らの思いを共有して頂くため、今後更
なる尽力をと考えているところでありま
す。

ただ現実はそのほど易くなく、皆様ご
承知のとおり、我が特攻顕彰会も会員が

4000名近くまで多くなった事もあり
ましたが、ここ数年は会員の高齢化等に
より退会される方や世代交代とともにご
遺族の方々で特攻顕彰会から離れる方々
が多くなり、毎年新規入会者もおられま
すが、結果的に毎年100名程度の減員
となっております。昨年度末では1700
名を下回っております。特攻顕彰会の理
事会や全体委員会ではほぼ毎回、会員増の
方策が議題となり、いろいろな方策を話
し合っておりますが、妙薬が見つかって
おりません。現会員の方々による新規会
員の勧誘、各地の慰霊祭での特攻顕彰会
の宣伝や広報活動、新聞広告等々を行っ
ておりますが、退会者数を越える入会者
を得ることが出来ず、結果として会員数
が減少しております。皆様方に何かいい
案があれば是非ご提案頂ければと思っ
ております。

さて、この機関誌「特攻」が皆様のお
手元に届くのは夏本番の頃と思いますが、
今年も我が国の終戦記念日の8月15日が
やって参ります。私が「我が国の終戦記
念日」と申し上げたのは、皆さんの中に
は第2次世界大戦が終わったのは世界的
には9月2日であることをご存知の方も
おられると思います。昭和20年（194
5年）9月2日は重光葵外相・梅津美治

郎参謀総長等の日本全権団が東京湾上の
戦艦ミズーリを訪れ、同戦艦の甲板上で
重光外相が終戦の文書に署名された日で
す。私は本年9月中旬にフランスに出張
した際、パリ市内の軍が管理する戦争博
物館に行く機会がありました。ご一緒し
た日本の方々も博物館内の説明文を見て
「あれ？第2次世界大戦の終わりが8月
15日ではない」と驚いていました。世界
に数多くある戦争記念館や歴史博物館で
は、通常この9月2日を終戦日としてお
ります。我が国がポツダム宣言を受け入
れたのが8月14日であり、昭和天皇が玉
音放送されたのが翌15日でした。この日
を以て、我が国は組織的な戦闘を全て終
了しました。この様な事から我が国では
8月15日を終戦日としております。でも
世界の多くの国では9月2日に第2次世
界大戦の終戦行事を行っております。

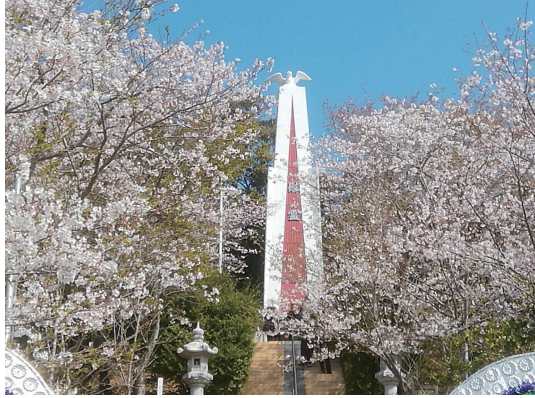
いずれにしても、私は、私達が現在平
和で安全な暮らしができ、かつ繁栄を享
受できているのは、特別攻撃隊を含む全
御英霊のお蔭と思っております。是非、
8月15日には御英霊に対し感謝申し上げ、
御霊の安らかならんことをお祈り申し上
げましょう。

第62回旧鹿屋航空基地特別攻撃隊戦没者追悼式に参列して

専務理事 兼 事務局長 石井光政

平成31年4月6日(土)、鹿児島県鹿屋市で行われた「旧鹿屋航空基地特別攻撃隊戦没者追悼式」に理事長の代理として参列する機会を得たので報告します。

当日の天候は快晴で、追悼式の間行われた市内小塚公園の桜も満開、その公園内に聳え立つ慰霊塔も桜に埋まっている感じでした。



式は定刻10時30分に始まり、海上自衛隊鹿屋航空基地の隊員による軍艦旗掲揚の後、国歌斉唱、海自ヘリコプターや哨戒機による慰霊飛行が行われ、引き

続き主催者である中西茂鹿屋市長の式辞、市議会議員長、御遺族代表森田了子様(昭和20年6月21日、鹿屋から出撃し沖繩周

辺海域で散華された、神風特別攻撃隊菊水部隊第2白菊隊古賀一義中尉の妹様)、予科練22期で御年89歳の藤本明様、そして、海上自衛隊第1航空群司令の川村伸一海将補からそれぞれ追悼の言葉が捧げられました。

献花ののち、海自儀仗隊による弔銃整射、式電披露、遺書朗読(正に本追悼式挙行の4月6日に神風攻撃隊第1神劍隊員として鹿屋を飛び立ち沖繩周辺海域で散華された松林平吉中尉の遺書)、旧鹿屋航空基地の生存者による同期の桜合唱が行われました。さらに、平和へのメッセージとして、鹿屋市立串良中学校1年生の安藤夢乃さんが、生まれ育った串良の桜並木が昔滑走路であったこと、その串良の地下壕に電信室が有り、特攻機からの最後の通信を傍受していたこと等を学んだことを通して、特攻で亡くなられた方への想いや、平和の大切さ、この平和を次世代へ繋ぐことの大切さとそれへの決意等の作文を朗読しました。

最後に海自隊員により国旗が降納され一連の追悼式は厳かな雰囲気の中、12時30分終了しました。

本追悼式には約400名の方が参列していました。そのうちご遺族は61遺族142名(鹿児島県内4遺族8名、県外57遺族134名)と、我が顕彰会が行っ



平和へのメッセージ朗読

は少しでも祖国日本の独立と繁栄を護るため努力しなければと深く胸に思った追悼式参列でした。

ている慰霊祭に比べ、ご遺族の参列が多いのが印象的でした。やはりご遺族にとつては最後に飛び立った地と言うのは特別な思いが有るのだと感じました。また、本追悼式は昭和33年に始まり、今回は62回目となりますが、慰霊祭によって後継者等の高齢化等により廃止されていく中で、恒久的に実施されるためには公共団体が主催で行う事の意義は大きいと思われました。大戦終結後74年、レイテ海戦時に閣大尉以下の神風特別攻撃隊敷島隊が出撃してから75年の歳月が流れました。100%の死を覚悟して出撃し、日本の未来の為に、愛する人々の為に散華された方々の死を無駄にしないためにも、我々

第43回都城特別攻撃隊戦没者慰霊祭に参列して

評議員 原 知嵩

平成三十一年四月六日土曜日に都城市特別攻撃隊戦没者奉賛会（会長 池田宣永都城市長）主催により開催された、同慰霊祭に参列して参りましたのでご報告いたします。

都城は陸軍の特攻基地として大東亜戦争末期に特攻隊とその直掩部隊が置かれました。昭和二十年三月から沖縄本島の地上戦が始まったことを受け、都城からも同年四月六日、第一特別振武隊の八名が出撃したのを皮切りに、七月一日、第百八〇振武隊の二名が出撃、沖縄方面への出撃は終了しました。特攻戦死者七九名。これは九州方面から出撃した陸軍特攻隊の一割程度にあたります。

全ての機材に新鋭戦闘機「四式戦（疾風）」が充てられたこと、敵艦に突入した特攻戦死者の割合が高いこと、また第一特別振武隊の出撃の際は未だ部隊の態勢が整っておらず、本来直掩部隊である飛行第一〇一、一〇二戦隊から志願しての編成だったとされています。

慰霊祭は「都城特攻振武隊はやて」と題された慰霊碑のある都島公園で行われ

ました。この都島公園はかつての陸軍墓地だった敷地です。当日は天気も良く、私は西都城駅より徒歩で公園に向かうことにしましたが、途中通りかかった城山公園（都之城址）には古い城門に並んで海軍戦没者慰霊碑や都城出身財部彪海軍大将の銅像を目にし、陸海軍ともに縁の深い街であるという印象を受けました。都城特攻基地は東西それぞれに飛行場を持つていましたが、もともと西飛行場は昭和九年に歩兵二十三連隊凱旋記念に作られたものであり、東飛行場は昭和十九年に海軍によって急造されたものでした。

現在、そのどちらにも特別攻撃隊出撃記念碑が残っています。

公園の門は陸軍墓地時代を彷彿とさせる重厚なもので、門を通って慰霊碑へ続く長い階段を上ると、桜が咲く中に会場の白いテントがありました。市長が奉賛会会長ですので、さまざまな業務は市役所の方が担当されていました。

昭和五十二年に建立された慰霊碑は六メートルほどの白い石の中央が円形にくり抜かれており、これは「火の玉」「打って一丸」を意味し、「石よりも硬い信念を貫いた人々」を象徴するものであるそうです。また、碑の前には踏み石として、第二回までの特別攻撃隊出撃に使用された西飛行場のアスファルトを並べてあるなど、大変気持を込めた慰霊碑であると感じました。



桜に囲まれた慰霊祭会場



中央がくり抜かれた慰霊碑

この慰霊碑をはじめ、周辺には殉職自衛官の碑、戦傷者之碑、満州事变戦歿者合祀碑、陸軍墓地納骨堂、軍馬顕彰碑など、関係する碑等が集中し、また然るべく整備がされています。



都城特攻振武隊はやて慰霊碑

予定の十時半となり、慰霊祭が始まりました。本年は百四十名ほどの参列者で、遺族も積極的な参加をされているように見えました。祭文は池田宜永都城市長により奏上され、恒久平和と反戦へ努力を尽くすこと、そして都城より発進し戦没された特攻隊員、特攻以外、また掩護任務によつ

て戦死および殉職された勇士の崇高な心情を偲びかつ、戦後輝かしく発展した都城は英霊の加護と遺族の努力あつてのことであると御霊に語りかけておられました。追悼の辞は宮崎県偕行会眞方会長が代読され、陸軍士官学校五十七期生が卒業、校門を出る際には皆口々に「次は靖国でおおう」と誓い合ったエピソードを紹介していました。都城から出撃した特攻隊各隊長は陸士五十七期出身者が務めていました。続いて献茶の儀、献花の儀が行われました。献花は出撃日の順で遺族によつて花が手向けられました。

その後、来賓の挨拶がありました。松下新平参議院議員をはじめとした地元ゆかりの議員の方々が出席されておられました。幾人かは翌日の宮崎特攻基地慰霊祭にもお出になられてお

り、大変熱心にサポートをされている印象でした。献詠は女性三人が「弔特攻勇士（とつこうゆうしをとむろう）」と題した松尾青雨作の「国家存亡の時に身を挺した特攻隊員が、神となり仏となつて後の世を守りゆくだろう」という意味の詩を吟じました。続いて陸軍士官学校五十七期生と偕行社会員混成六名による「陸軍士官学校校歌」「同期の桜」の献歌があり、軍人らしい勇ましい歌を聴くことが出来ました。

その後、地元中学生による「平和への想い」の朗読があり、平和学習で訪れた広島での講話を聞いて、戦争をしないことが私たちの使命であると感じているというメッセージを発表していました。

遺族代表挨拶は第五十九振武隊隊員の甥の方が立たれ、戦争が始まり、親族では一人も兵隊に行っていない者がおらず身の狭い思いをしていたところ、叔父様が真っ先に志願されたという家族という背景からみた特攻隊員についてお話になりました。

閉式のご挨拶では、平成の三十年間を振り返り、戦争がない三十年間というものには、座して得られるものではない、諸英霊の並々ならぬ働きの上になりたつてあるというところがあらためて強調されました。閉式に際しては、行きに通るかかった城山公園の本丸跡にある都城歴史資料館が紹介されましたが、こちらには詳細な解説が付けられた特攻隊関係の展示、また遺品などの展示や四式戦に関する展示品もあるとのこと。帰りに立ち寄り、見学したが、慰霊祭後に近傍で関連展示が見られるのは素晴らしいと思われました。前述の西東それぞれの飛行場跡の碑についても案内があり、万事大変丁寧な印象を受けました。



宮崎特攻基地慰霊碑（鎮魂の碑）

第36回宮崎特攻基地慰霊祭に参列して
 評議員 原島 淳子

平成31年4月7日（日）宮崎県宮崎市宮崎ブーゲンビリア空港西に隣接して建立されている、宮崎特攻基地慰霊碑（鎮魂の碑）前に於いて斎行された、宮崎特攻基地慰霊祭実行委員会（会長 後藤徹夫氏）主催の「第36回宮崎特攻基地慰霊祭」に、当顕彰会を代表し、原評議員及び熊本在住の友人と、昨年に続き参列さ

せていただきました。慰霊祭典は、式典開始のアナウンスの後、開会の辞に始まり、国歌斉唱・国旗掲揚と続き、陸上自衛隊都城駐屯地らっぱ隊による吹奏、儀仗隊による弔銃斉射、黙祷と式次第に則り粛々と進められました。

宮崎特攻基地慰霊祭実行委員会後藤徹夫会長による追悼の辞では、「今日4月7日は、神風特別攻撃隊第四銀河隊・第三御楯隊（706部隊）の17歳から25歳の26名が飛び立った日。

いつかは宮崎特攻資料館を造り、生き証の場にしたい。また、戦争の無い平和の時代をこれからもつくっていく。資料展の開催や遺構の整備にも取り組んでいる。」と述べられました。

続く慰霊のことばは、宮崎市長及び遺族代表の、この4月7日に第三御楯隊で散華された吉田政道飛長（第一期乙種豫科飛行練習生）の弟、吉田紀さんによる「日本の平和への礎として、約300万人の兵士が散った事を忘れてはならない。この礎になった思いと歴史を語り継いでいきたい。

兄が飛び立って征ったここ宮崎の地に母は来たいと言っていた。多くの人達が慰霊碑を守り、平和の教育している事に

驚くとともに感謝をしている」ということばでした。

続いて献花・赤江小学校卒業生代表2名による特攻基地に学んできると言う作文の朗読・祭電披露・赤江小学校生による「おぼろ月夜」・「ふるさと」の吹奏楽演奏と続き閉会の辞の後、一同礼で慰霊式典は終了いたしました。

桜の花びらが舞い落ちる中で行われた慰霊祭の会場は、宮崎空港に隣接しております。空港に隣接している事もあり、今年も時々ジェット機の音が聞こえるなかでの慰霊祭でした。

奇しくもこの日は、後藤会長が追悼の辞の中で述べられた通り、昭和20年4月7日、神風特別攻撃隊第四銀河隊11名・第三御楯隊（706部隊）15名計26名の方々がここ宮崎の基地より沖繩の米艦船に向かい飛び立って征った日でした。そのような日の慰霊祭、合わせる手にも祈る想いにも、いつもとは異なる気持ちになったのは私だけではないと思います。

この宮崎特攻基地慰霊祭は、小学生・中学生が参列し、また、市の職員の方々も関わって行われている希少な慰霊祭だと思えます。

小学生は6年生の時に、語り部の方か

ら話を聞く機会を設けられており、赤江と戦争に関して学んでいるとの事。

「お話をきかせていただいた方々のその時の気持ちを理解するのは難しいけれど沢山の事を学んできた。知覧で手紙を読んだ時には、想いが痛い程伝わり胸が締め付けられる様だった。」と式典の時に

作文を朗読した二人。また、地域に感謝する会で、自分達で役作りをして、劇を披露するとの事。この劇を通して、当時の特攻兵の様な人達を出したらいけない事。戦争を二度としてはいけない事を、多くの人に伝えられたとも語っていました。この時の劇さながらの語り口調での朗読には、まわりからすすり泣きが多々もれ聞こえており、かくいう私も涙が溢れておりました。きちんと子供達に平和の尊さと戦争についての想いが伝わっている事を嬉しく思わずにはいられませんでした。

慰霊祭は、九州に限らず各地で行われております。関係者でなくとも参列させていただきます。

是非一度参列させていただき、国を守り家族を守り、故郷を守るために散華された方達に手を合わせていただきたいと思います。

宮崎空港の送迎デッキには、新たに慰霊碑の案内板が設置され、慰霊碑に行く道にも新しい案内板も設置されておりました。ここ宮崎空港を訪れる方達は、すぐそばにあるこの慰霊碑に、手を合わせに来ていただきたい、そう願って止みません。

最後に次の句を捧げます。
君征きし 南の空に 桜咲く



宮崎空港送迎デッキに設置された慰霊碑案内板



万世特攻慰霊碑「よろずよに」

万世特攻慰霊碑第48回慰霊祭参列報告

編集長 金子 敬志

平成31年4月14日(日)、鹿児島県南さつま市加世田の特攻慰霊碑「よろずよに」の前において、万世特攻慰霊碑奉賛会主催により執り行われた慰霊祭に、理事長代理として参列したので、以下のとおり、その概要と所見を報告する。

一 概要

慰霊祭は、万世特攻平和祈念館前にある特攻慰霊碑「よろずよに」の前において、定刻10時30分から執り行われた

- 天候は、予報では午後から雨との事でそれを予感させるような曇り空であった。慰霊祭の式次第は、次のとおりである。
- ・慰霊飛行
 - ・遺族・旧隊員の紹介
 - 1 開式の言葉 奉賛会副会長
 - 2 国旗掲揚 旧隊員
 - 3 黙とう
 - 4 追悼の言葉 奉賛会会長
 - 5 慰霊の言葉 遺族代表・旧隊員代表
 - 6 祭電披露
 - 7 献詠 錦城会加世田道場
 - 8 献花 参列者全員
 - 9 献奏
 - 10 感謝状贈呈
 - 11 南さつま市長あいさつ
 - 12 若者の誓い 学生代表
 - 13 合唱
 - 14 国旗降納 旧隊員
 - 15 閉式の言葉
- 慰霊祭開始に先立ち、慰霊飛行と参列されたご遺族・旧隊員の紹介が行われた。慰霊飛行は、ここ万世平和祈念館のある薩摩半島と錦江湾を挟んだ対岸の大隅半島に所在する海上自衛隊鹿屋航空基地所属のP-3C哨戒機が実施した。
- 鹿屋基地は、現在は海上自衛隊の航空基地であるが、大戦中は旧海軍の航空基



慰霊飛行をするP-3C

地として使用されており、沖縄戦においては多数の海軍特攻機が出撃した基地である。

御遺族紹介では、複数人で参加された方が多く見受けられたのが印象的であった。旧隊員は、2名の方が参列されていた。私が4年前に参列させて頂いた時は5名であったが、旧隊員の高齢化に伴い仕方ない事だが、残念と感じた。

また併せて、来賓等の紹介も行われ、当霊顕彰会もご紹介頂いた。

慰霊の言葉は、遺族代表として、第1

44振武隊隊員岡田義人伍長(戦死後少尉、特操2期、石川県出身)の甥に当たる岡田浩明様が、旧隊員代表として飛行第66戦隊に所属された上野辰熊様がそれぞれ述べられた。

慰霊祭は、式次第に従って粛々と進められ、学生代表による若者の誓いは、南さつま市立大笠中学校3年生の上村夏生さんが行った。これに続き、参列者全員で「海ゆかば」の歌を厳かに斉唱、終わって国旗降納し、奉賛会副会長による閉式の言葉で慰霊祭はお開きとなった。

この後、式次第にはないが、主催者が準備したお酒を、ご遺族、旧隊員、希望者が慰霊碑にかける「献酒式」が執り行われ、すべての行事を終了した。

終了時間は12時10分であった。

二 所見

4年前に初めて参列させた頂き、今回が2回目の参列である。

慰霊祭の運営は、地元南さつま市が全面的に支援しているようで、前回と同様に案内や受付に市職員らしい若い方々の姿を見ることが出来た。

慰霊祭の規模は4年前と殆ど変わらず地元自治体の支援がある事から、今後ともこの慰霊祭は継続されるものと感じた。

万世基地は終戦間際の昭和20年3月から7月までのわずか4ヶ月の短い期間の使用であり、秘密飛行場という特質からその存在が知られていないことを残念に思っていた苗村七郎氏は私財を注いで、特攻碑「よろずよに」を建立、「万世平和祈念館」を開設した。

苗村氏は特操1期生として陸軍航空に身を投じ、特攻出撃を待つ内に終戦を迎えられた。万世から出撃した戦没特攻隊員は201名に上り、苗村氏の同期の方も多数おられ、その無念さが生涯慰霊の想いを強くされたものと拝察する。



受付風景



同期生に献酒する呉正男氏

慰霊祭がお開きになってから「献酒式」が行われたと記したが、式は、お墓に水をかける時に使うような桶に、水の代わりにお酒が入れてあり、それをご遺族、旧隊員、希望者などがゆかりのお名前が刻まれた慰霊碑にかけるもので、同期生の慰霊のため参列された当顕彰会の会員、呉正男氏は万世から出撃・散華された6名の同期生のお名前を見つけて懐かしそうにお酒をかけておられたのが印象的であった。



前夜に開催された交流会

平成31年度出水市特攻碑慰霊祭に評議員 福江広明と編集長 金子敬志が参列させて頂いたので報告する。

一 概要

慰霊祭の前日4月15日(月)に市内のホテルにおいて交流会が催された。交流会は恒例のもので約50名の参列があり、地元の方々と交流を持つことが出来た。

第60回出水市特攻碑慰霊祭に参列して
 評議員 福江 広明
 編集長 金子 敬志



特攻碑前の祭壇、後方にあるのは戦没者の遺影

慰霊祭は出水市平和町特攻碑公園内の特攻碑前で執り行われた。
 当日4月16日(火)は爽やかな好天に恵まれ、青空の下での慰霊祭となった。
 開催日は昭和35年4月16日に特攻碑が建立されたのを記念して毎年4月16日開催とされている。
 参列者は遺族20名、元隊員20名、来賓・一般110名、その他支援員等50名の約200名で、市長を先頭とした出水市の協力が印象的であった。
 慰霊祭の開始は11時で、式次第は次の

- とおりである。
- 1 国旗及軍艦旗掲揚
 - 2 開式の言葉
 - 3 黙祷
 - 4 碑への供花
 - 5 慰霊の言葉
 - 6 自衛隊儀仗隊捧銃
 - 7 自衛隊音楽隊献奏
 - 8 千羽鶴奉納
 - 9 献花「雲の墓標」に全員献花
 - 10 メッセージ(電報)の披露
 - 11 自衛隊音楽隊記念演奏
 - 12 同期の櫻合唱(全員)
 - 13 軍艦旗降下
 - 14 閉式の言葉
- 国旗及び軍艦旗の掲揚は出水市消防団幹部が行ったのが目新しかった。
 碑への供花では特攻隊戦没者慰霊顕彰会としてご紹介されての供花であった。
 慰霊祭は式次第に従って済々と執り行われたが、やや予定より伸びて12時30分終了となった。(金子敬志 記)
- 二 所見
- 航空自衛隊・西部航空方面隊司令官として、私が鎮西の防空任務に就いたのは、平成二十四年夏からの一年。この間、同司令部の准曹士先任(航空方面隊で勤務する、いわば下士官の最先任者)の職に

あった信頼する部下と共に、大東亜戦争時、九州管内に所在した海軍航空基地に関する文献・資料等を勤務時間外に探し回ったことを思い出す。私達が意気投合したのは、彼の父が私の実父と同期の桜で第十五期甲種飛行豫科練習生であったからである。

実父は昭和十九年九月十五日に鹿児島航空隊に入隊している。その後所轄替えで異動になるまで一か月半の間、同航空隊に所属し、日々悪化する戦況と不足する兵器・物資の中で苛烈な訓練に臨んでいたようだ。こうした個人的関心もあって、特攻隊戦没者慰霊顕彰会の評議員となつて二年目の今年、鹿児島県内で催される慰霊祭等への参列を切望して出水(いづみ)の地を訪れた次第である。

出水市慰霊祭において、顕著であったのは「顕彰性」ではないだろうか。主催者、ご遺族、関係団体、さらには市民の方それぞれ立場で、特攻戦没者が我が国の存亡をかけて挑んだ必死の使命を戦後時代が進む中で、多くの方々知らしめるべきとの気概を強く実感させられた。

中でも椎木伸一出水市長にあつては、前任者である渋谷俊彦氏の特攻隊戦没者慰霊にかかる意を受け継がれ、地域の発

展を担う青年、学生、児童等に今日の郷土が如何に安全・安定の中で存続しているかを教え導こうとされる積極的な姿勢がうかがえた。特に、基地跡の掩体壕及び資料館の整備等に予算を確保して歴史観を醸成する具体的な行為を進めていくことを特攻碑顕彰会会長として慰霊のこ

とばを述べられたのが印象的であった。当該慰霊祭では、碑文に注目してみた。碑は、歴史認識を体現すると言われる。

戦没者慰霊の碑は、戦争の正当性と特攻の意義が整齊と刻まれている場合が多い。

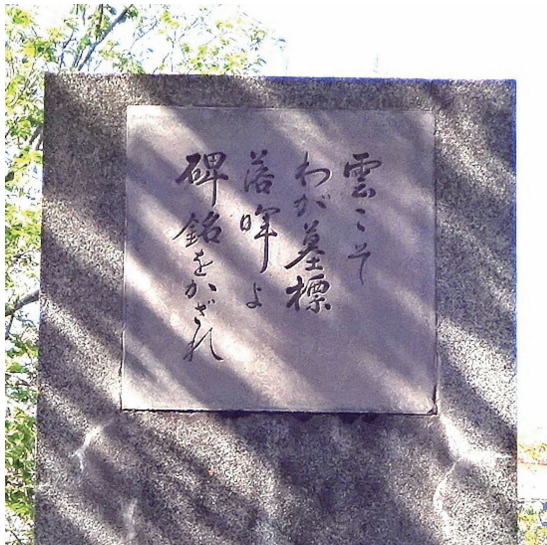
この出水市における特攻戦没者の碑には、「雲こそわが墓標 落暉よ碑銘をかざれ」とあり、作家・阿川弘之氏の小説「雲の墓標」から取ったものとされている。慰霊祭に参列するにあたり、私はあらためて同小説を読み返した。主人公が旧友に宛てた遺書の一文である。憂国の士が旧友にこれまでの親交を吐露しつつも、現世に未練を残さず国家の大義に身を賭す心情がひしひしと伝わってくる。

この碑文を読むにつけ、夕日に彩られる雲を見るたびに、航空特攻により散華された若き英霊に思いを寄せ、心穏やかに供養したい気持ち自然に込み上げるのである。

私自身、防衛大学の同期生で戦闘機

の操縦者のうち、二名が殉職している。一人は、昭和六十三年六月石川県小松沖の訓練空域でF-15編隊長として対戦闘機戦闘訓練中に、もう一人は平成六年十月釧路沖地震に伴い、RF4偵察機での実任務飛行中、北海道長万部町静狩峠付近で、それぞれ永い眠りに付いている。彼らの供養は日々自宅の仏壇に向かって行なってきたが、これからは夕日に映える雲を眼にする際には、墓標として彼ら亡き同期生に語りかけることにしたい。

(福江広明 記)



特攻碑の碑文

平成31年度国分基地特攻隊員戦没者慰霊祭
副理事長 岩崎 茂

第56回国分基地特攻隊員戦没者慰霊祭が4月21日(日)に陸上自衛隊国分駐屯地の正門の前に所在する特攻碑公園内で、「国分・溝辺特攻慰霊碑保存委員会」(以降「慰霊碑保存会」という)の主催により厳粛に執り行われた。

今年の慰霊祭には例年と同程度の約150名が参加し、午前11時から開始された。慰霊祭は、まず最初に慰霊碑保存会長の中重真一霧島市長及び下深迫孝二霧島市議会議長の「慰霊のことば」があり、次にご遺族代表の中島富士子会長が「追悼のことば」を述べられ、その後、参加者全員による献花となった。そして、「誓いの言葉」を霧島市立国分南中学校生徒代表が読み上げて終了となった。慰霊祭終了後は、慰霊祭参加者は徒歩で国分駐屯地内に移動し、駐屯地内の隊員食堂であり堅苦しくない形式での昼食会が行われた。

そして昼食後は、国分第2飛行場に移動し「国分基地特攻隊員戦没者慰霊の集い」が溝辺上床公園内「特攻慰霊碑」前に於いて行われた。私は国分第2飛行場と聞き、勝手に国分駐屯地から比較的近

いところをイメージしていたが、車で結構な時間がかかるくらい距離的に離れた場所であった。こちらの「慰霊の集い」には午前中の半分程度の参加者であったものの、午前中の慰霊祭と同様、慰霊碑保存会長の中重霧島市長が「慰霊のことば」を述べられ、その後、全員による献花、そしてこちらの慰霊行事でも霧島市立綾南中学校の生徒代表者が「誓いのことば」を述べられ終了となった。

午前中の「慰霊祭」と午後の「慰霊の集い」は、ともに慰霊碑保存会の主催ですが、会長は霧島市長であり、霧島市が全面的に支援しており、現職国会議員や国分駐屯地司令を始めとする現職自衛官及び自衛隊関係の諸団体等も多く参加していることから、今後も安定的に継続していくと考えられる。可能であれば、午後の「慰霊の集い」にも現職自衛官がもう少し多く参加して頂ければと思います。また、各慰霊祭で若い世代の方々の参加を目にしますが、特攻隊員の御遺志を後世にも伝える観点から大変好ましい事と感じさせられた。特に、今回の国分での午前中及び午後の慰霊祭で中学生が「誓いのことば」を述べている事は大変印象的でした。今後とも是非継続すべきと考えます。

沖縄県護国神社春季例大祭と「あゝ特攻勇士の像」慰霊祭

理事長 藤田 幸生

那覇市にある沖縄県護国神社の加治順人宮司と外間盛善総代からのご案内を頂き、春季例大祭へ、白田智子理事と二人で、遠路、参列してきました。

平成31年4月24日、例大祭に引き続き、昨年4月に建立された「あゝ特攻勇士の像建立一年祭」が、併せて、碑の前で、執り行われたのです。

春季例大祭等は、今にも降りだしそうな曇天のテントの下で、盛大に挙行されました。参列者は、沖縄全県下のみならず、県外からも、沢山参列されていました。その参拝者は、私が今までに参列したどこの護国神社よりも多く、盛大でした。行事も、沖縄民謡、舞踊等、沖縄に駐屯する陸上自衛隊の音楽隊演奏等、各種イベントが計画され、実施されています。盛大でした。

一般の春季慰霊の例大祭終了後、鳥居脇の「あゝ特攻勇士の像」前で、建立一周年目の「特攻慰霊祭」が、催行されました。今年は、初めて出席される、沖縄出身の特攻隊ご遺族も、参列されています。式典は、陸自沖縄駐屯地の音楽隊演奏の下に、厳粛に行われました。

昨年、この地に、「あゝ特攻勇士の像」が、鍛冶宮司様他の沖縄の皆さんのご尽力で建立されたことは、当頭彰会にとつて、何よりのことでした。特攻隊戦没者慰霊顕彰会にとつて、沖縄の地は、特別の意味があります。念願でした。それは言うまでも無く、終戦間際、沖縄戦のため、南九州を始め全国の各基地から、陸海軍の多くの若者達が、沖縄に向かつて特攻散華されたからであります。

私の、深く存じ上げている、海兵71期長谷川薫様（特攻機「銀河」搭乗員、沖縄海域で撃墜され、米艦「キアラハン」に救助され、生還された。（株）「レンゴウ」の社長、会長）も、予備学生14期の森丘哲四郎様（昭和20年4月27日沖縄東方海域で第5七生隊員として散華）も、千正興様（現千玄室裏千家大宗匠）も皆さん、「沖縄特攻」に拘わっておられます。

特攻作戦の中でも、最も厳しかった「沖縄」の地に、この特攻像を建立することは、沖縄県出身の特攻戦没者慰霊は、勿論のことですが、その他の意味でも、我が会の悲願でありました。

その意味において、今回の慰霊祭参列は、大変感慨深く、意義深いものでした。合掌！

第28回秋田県特別攻撃隊招魂祭に参列して

評議員 及川 昌彦

平成31年4月29日(月)、秋田県神社において開催された第28回秋田県特攻隊戦没者招魂祭に岩崎茂副理事長と共に参列しました。



昭和天皇武蔵野御陵遥拝

桜が残る晴天の中、東雲飛行場戦没者慰霊顕彰会の小野立事務局長による司会で開式後、参列者全員で昭和天皇武蔵野御陵遥拝、国歌斉唱、黙祷し、「国の鎮め」が佐々木三知夫氏によりラッパ吹奏されました。



神前神楽奉納

神事、祭詞奏上・神前神楽奉納の後、元土浦海軍航空隊で夜間戦闘機「月光」搭乗員だった藤本光男氏による追悼文朗読、碑文朗読、大西中将遺書朗読、「同期の桜」「空の神兵」のハーモニカ伴奏での玉串拝礼、歌手SAYAさんによる献歌「ほたるの光」では普段は歌われないう四番まで熱唱されました。聖寿万歳後、全員で「海ゆかば」を合唱して終了しました。

会場を移動して秋田県特攻慰霊シンポジウムに参加しました。
パネリストは落合峻元海将補、奥本康

大特攻顕彰会会員、荒木和博予備役ブルーリボンの会代表、上島嘉郎雑誌正論編集長で、SAYAさんによる君が代斉唱で始まりました。残念ながら帰りの時間の都合のため途中退出しましたので、来年以降の参列者はもう1泊をおすすめします。

追悼のことば(藤本 光男氏)
ここ総社神社構内に、故榎谷健夫様が、まさに精魂込めて建立された、「特別攻撃隊忠魂之碑」の除幕式が執り行われたのは平成四年四月二十九日。毎年欠かすことなく、本日第二十八回招魂祭を迎えた。

私が、ここに立ち追悼のことばを述べ、二十五回を数える。特別攻撃隊ご英霊の多くは「大正」に生を受けた。そして昭和の戦争に育ち、学業を終え、また学業半ばにして戦場におもむき散華された。

終戦のとき、二十才から三十五才までの大正生まれの若者であった。正に戦場の第一線で、あの大東亜戦争を闘い、散っていたのは大正の青年たちであった。

大正から昭和、そして平成となり、その平成も明日で終わる。五月一日から、元号は「令和」となる。

吾ながら、よくここまで生きてきたと思う。

この碑に名を刻まれた五十六柱のうち

六柱が私の同期生である。

「笑うな桑野、俺だ、藤本だ」

九十才を過ぎると皆こういう顔になる。

「石橋、小松はうなづいてるぞ」

「高橋、山本は笑顔を見せている。昔のままだ」

みんな有り難う。

桑野正明君は五月十二日、攻撃機「天山」を駆り沖縄の海に散った。満十八才であった。

その前、四月十二日には高橋忠君が「艦爆彗星」で、今日四月二十九日山本英司君が零戦に二五〇キロ爆弾を抱き、沖縄の海を黒々と埋めた敵艦隊に体当たり攻撃をかけた。

君の後から、石橋賢司君が「菊水雷桜隊」員として散華、八月九日には小松文男君が第七視御楯隊流星隊員として金華山沖に群がる米艦船に突入した。

特別攻撃隊である。

その一週間後、日本の敗戦であるの大戦の幕は閉じた。

今、特別攻撃隊を語る人は稀有となった。あの大東亜戦争を聖戦と呼ぶ人をこの日本の中で見出すことは殆んど無理である。

私が子供の頃、初めて世界地図を見て驚いた記憶がある。

赤い絵具をしぼりだしたように、南北の細く連なる小列島が日本であった。

インド・ビルマ・マレーシア等がイギリス領、スマトラ・ボルネオ等がオランダ領東インド。ベトナム・ラオス・カンボジア等がフランス領インドシナ、と記されていた。

支那大陸は捨てられた大地、と中学生のときに教わった。

日本の敗戦後、アジアの植民地は皆独立した。

戦後多くの外国人は、このアジア植民地の独立をこう評している。

「第二次世界大戦において、日本人は日本のためよりも、むしろ戦争によって利益を得た国々のために偉大な歴史を残したといわなければならない。その国々とは日本の掲げた短命な理想であった「大東亜共存圏」に含まれた国々である。」

(アーノルド・トインビー)

また、特別攻撃隊については、前に申し上げたが、アンドレマロー氏の言葉を五十六柱ご英霊に捧げたいと思う。

「祖国と家族を想う一念から恐怖も生への執着もすべて乗り越えて、いさぎよく敵艦に体当たりした特別攻撃隊員の精神と行為のなかに男の崇高な美学をみるのである。」

ご英霊に申し上げたい。

「諸兄にとつて誇りではないか。

そして語りつぐことが、私たちの責務である」と。

戦後七十三年も過ぎた今年になって、私は思いがけないことを知らされた。

私が昭和十九年九月、夜間戦闘機「月光」搭乗として、名古屋明治基地に配属されたとき、ペアを組ませて頂いた学徒出身の大宮司松太郎中尉、兄のように慕い、わがままも言っていた。

翌二十年、敗色濃厚となった日。航空隊は徐々に「特別攻撃隊」に組み込まれていった。その四月、大宮司中尉から「おい、俺は明日転勤だ。元気でな。」と淡々と言われた。私の頭をよぎったのは九州鹿屋基地である。

だが、生きておられた。大宮司中尉もその後、私は戦死したと思っていた様であった。

電話には出られないので文通が始まった。戦後、隣の岩手県で教職にあり、中学校長で退職、自宅で療養中という。

今、お会いできる日を楽しみしている。もうひとつの出来事というのは、藤枝航空基地のことである。「芙蓉部隊」と言った。私達は部隊名が判らなかつた。私たちは連日、夜間洋上訓練に励んでいた。黎明、薄暮、夜間。燃料不足の中、しごきの様な訓練であった。先輩搭乗員達の多くは九州岩川基地に転出した。岩川基地がどこにあるか、私には判らなかつた。

「芙蓉部隊」は特別攻撃隊ではない。藤枝から岩川基地経由、沖縄の米軍艦船の

夜間攻撃をかけ、戦果をあげて還ってくる猛者達も居た。往復三千キロである。

戦後、マツカーサー司令部は血眼になって「芙蓉部隊々員」をさがしたという。

私はさがし当てられ、昭和二十一年知らぬ顔して入学した官立高等商業を「退学を命ず」のマツカーサー司令部の指示により、退学となった。

動揺したが、翌二十二年私立大学が私をひろってくれた。

ご英霊につまらないことを話してしまつた。

お許しください。

毎年この招魂祭の祭祀をつとめられる総社神社宮司川尻孝紀様に心から感謝の意を表し、実行委員長山本高敬様そしてご参加皆様に厚く御礼を申し上げ、追悼の言葉を終わります。

有り難うございました。

また本日、榎谷政雄様のお招きで落合峻様、奥本康大様、荒木和博様、上島嘉郎様、SAYA様がお見えです。

このあと、先生方を囲むシンポジウムが予定されております。

是非ご参加賜りますようお願い申し上げます。

平成三十一年四月二十九日

藤本 光男

第六十五回知覧特攻基地戦没者慰霊祭に参列して

理事 岡部 俊哉

令和元年五月三日(金)、第六十五回知覧特攻基地戦没者慰霊祭が知覧特攻平和観音堂前にて執り行われた。



到着後、南九州市知覧体育館に入つて

受付を済ませる。体育館では、毎年御遺族として参列される弊会の「慰霊合唱」で閉式となる。

白田智子理事(第二十三振武隊長 伍井芳天中佐次女)

ととも、鹿兒島偕行会会長 麓川昭憲様

をはじめとする多数の自衛隊OBの方々

と旧交を温める。

体育館を出て自衛隊鹿兒島地方協力本部長 高岩俊弘一海佐等、現役自衛官と当時の配置図や掲示物を静かに拝観しながら会場に向かう。五月晴れの知覧特攻がら暫しの散策。

平和観音堂上空には、海上自衛隊鹿屋基地のP-3C哨戒機が慰霊で飛来、会場へ移動する参列者も足を止めてのその勇姿に見入る。

十三時から、「献茶」、「黙祷」、「読経・焼香」、知覧特攻慰霊顕彰会 木弘幸会長(南九州市長)の「追悼のこ

とば」、御遺族代表を含む五名の方の「慰霊のことば」、「献詠」、「献花」、陸上自衛隊第十二普通科連隊音楽部によ

る「献奏」及び「南九州市長あいさつ」が順次行われ、厳かにかつ整齊と式が進

行する。そして最後は、参列者全員によ

る「加藤隼戦闘隊」及び「同期の桜」の

主催者によれば、約八百人の参列を得

た。御遺族にはお孫さん世代の参

列が増えてはいるものの、関係者の方々

の御高齢による辞退が増加、全般的には

ここ数年減少傾向にある。これまで以上



「三角兵舎の跡」 神

昭和二十年三月末に、三角兵舎地区の奉仕を命ぜられた知覧高等女学校の三年生の一人、

こんなせま苦しいところで生活なさるのだと思つたとき私達はぶくぶくした布団に休むのが恥づかしい位だった。わら布団に毛布だけ、そして狭い所に再びかへらぬお兄様方が明日の出撃の日を待つて休まれるのだと思ふと感激で一杯だった。五時半かへる。

「三月二十八日」

今日は特攻隊の方のいらつしやるお部屋へまはされたが、初めてのことで恥づかしくしたり逃げたりしたが、自分の意気地のないことを恥ぢた。明日からはどしどし特攻隊のお兄様方のおつしやることをおきくして、お洗濯やらお裁縫を一生懸命やらうと思ふ。

「三月二十九日」

朝お洗濯をして午後ちよつと兵舎の掃除をしたついでにお話しを承る。大櫃中尉を隊長とする第三十振武隊の方々は若いお方々で、隊長さんの威厳とした態度、私達には至つてやさしい隊長さん、部下の方々も実に隊長様になつていらつしやつた。松林の中で高らかにうたふ。

「三月三十日」

今日はお出発なさるとのこと。朝早く神社の桜花をいたゞいて最後のお別れとして私達のマスコット人形とを差上げる。無邪気に喜ばれる。トラック貨物で飛行機のところまで行つて食糧等を詰込んであ

げる。皆ほがらかに「元気で長生きするんだよ」と言はれて愛機に飛び乗られる。愛機には、さまざまなマスコット人形が今日の出撃をものがたるやうに風にゆられてゐる。出発なされたが天気の都合でかへられる。大変残念がついていらつしやつた。

「三月三十一日」

今日は一日のんびりと特攻隊の方々とは芝生でお話しをする。全部の方々の住所をおきくする。佐々木、池田兵長さん、地獄三途川区三丁目草葉蔭とかゝれる。そして、女学校生活などお話ししてお兄様方の軍隊生活のお話しもおききする。福家伍長様には私達と同年の妹様がいらつしやるさうで妹さんのお話しもおきくする。

「四月一日」

今日はお洗濯、掃除をした後皆でお話しをする。

十八歳の今井兵長さん、福家伍長さん二人で杉の皮をけづられ「伍長グラマン」と書かれる。何時までも何時までもお二人のことを物語るやうに。そして妹さんに笑つて出撃したと書いてくれとおたのみになる。血書をして私も一緒にとマスコット人形、髪の毛、爪を渡されたさうで、この立派なお兄さん、そしてこの立派な妹さんのことをお聞きして感泣する。

められた「特攻日記」の一部が、「三角兵舎地区の記録」と題して紹介されている。

特攻日記

「三月二十七日」

作業準備をして学校へ行く。先生より突然特攻隊の給仕に行きますとのこと、びつくりして制服にきかへ兵舎まで歩いて行く。はじめて三角兵舎にきてどこもここも珍しいものばかり、今日一日特攻隊の方々のお部屋の作り方。

この日、岩脇さんと戦闘指揮所へ行く。

利用させて頂いたバスが、偶然三角兵舎跡地経由だったお蔭で初めて現地を訪問することが出来た。特攻平和会館隣に復元された三角兵舎とは趣が異なる、建屋のない物静かな佇まいが、様々なことを語りかける。気が付くと手を合わせている。

慰霊祭の参列に加え、忘れることのない慰霊の旅となった。



三角兵舎跡地の「特攻日記」

令和元年第七回福岡県特攻勇士慰霊顕彰祭に参列して

評議員 福江 広明

一 慰霊顕彰祭の概要

令和元年五月十一日(土)、「第七回福岡県特攻勇士慰霊顕彰祭」(以下「慰霊顕彰祭」)が、福岡市の中心部にある福岡護国神社(中央区六本松一丁目一番一号)内の参集殿において催行された。文献によれば、福岡護国神社の起源は、明治元年十一月福岡藩第十二代藩主黒田ながとも長知が戊辰戦争に殉じた藩士一三二人の慰霊顕彰のために、妙見・馬出まいだし招魂社を建立したことにありとされている。

当該神社へのアクセスについては、バス、地下鉄、私鉄と複数の公共交通機関の利用が可能である。私自身は、福岡県有数の観光地であり、福岡市民の憩いの場でもある大濠公園内を散策したいとの思いもあって、地下鉄空港線の大濠公園

駅で下車して福岡護国神社に向かった。気温二十四度、湿度五十五%、風速二m程度と、少し汗ばむ陽気の下、徒歩約十五分の道程であった。

受付手続きを済ませ、開式までの間に境内の史跡等を見学してみた。昭和二十

年六月の福岡大空襲の際にも焼失せず、創建時の姿をとどめている桧の原木で造られた大鳥居が特に印象的であった。



福岡護国神社の大鳥居

その後、開式に先だって、持参の御朱印帳に神紋印と社号印を賜り、奉拝の証とさせて頂いた。

今年の参列者は主催者によれば二百名を超えたとの事。昨年在約二百名であったことから、元号が令和に変わった節目の年に当たったことと、快晴に恵まれたことが微増に繋がったと考える。

慰霊顕彰祭(祭典之部と式典之部の二部構成)は、定刻の十一時に祭典之部からの開始となった。国旗敬礼、国歌斉唱、黙祷に引き続き、神事として修祓之儀、降神之儀、献饌之儀が執り行われた。田村豊彦宮司による祝詞奏上の後、祭主である福岡県特攻勇士慰霊顕彰会会長・塚

田征二氏から、将来にわたる慰霊顕彰の必要性と国民の道徳教育の強化を主旨とした慰霊の言葉が述べられた。さらに玉串奉奠、轍饌之儀、昇神之儀と続き、約一時間で祭典之部を終了。

休憩等挿んで催された式典之部では、追悼電文の奉読後にソプラノ歌手及び博多券番ご一同による奉納、参列者全員での「同期の桜」を奉唱。いずれも英霊の顕彰に相応しい選曲と演目であった。

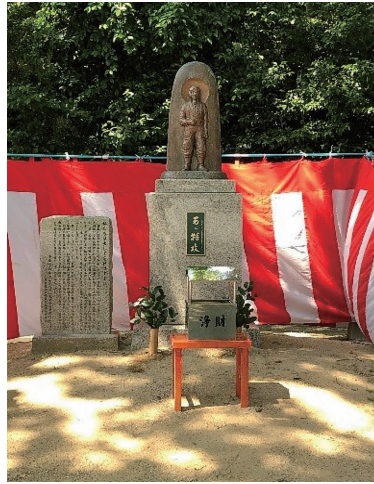
式典之部の終了にあたり、遺族代表・吉江正春氏が、散華された従兄弟のありし日を偲びながら、自衛隊の精強性を維持する必要性とあくまでも戦争回避を貫く国家の姿勢を強調された。

二 所見

福岡県護国神社は、十二万㎡の広大な敷地を有し、緑豊かな杜に囲まれているゆえに、神聖さを強く意識する存在である。同社の官司である田村豊彦氏は、福岡県内に所在する管崎宮の名誉官司である田村泰邦氏の弟御にあたられる。

私自身は、平成二十四年夏から一年の間、航空自衛隊西部航空方面隊（司令部は福岡県春日市に所在）で司令官を務めていた際、管崎宮には我が国の平和はもとより、福岡県民並びに部下隊員の安全、

各種任務の完遂の祈願等で何度も参拝させていただいた。この点ではすでに当時から福岡県護国神社との縁があったわけであり、今後、来福時には護国神社並びに参集殿の傍らに建立（平成二十四年十月八日）されている特攻勇士の像の奉拝を心がけたい。



福岡県特攻勇士の像

今回、参列して個人的に印象深かった二つの点を簡単に述べてみたい。

まず、戦没者慰霊行事に地域住民等の参集効果を高めることを意味する「公共性」についてである。式典之部で奉納された催しは、芸能文化の高いレベルにあり、和やかな中にも慰霊顕彰を見事に表現されていた。戦没者のご遺族の参加が年齢的な制約もあり極めて少なくなる中で、主催者が公共性を慰霊行事に如何に取り込むべきについて尽力されていることを

直会において知ることができた。

二つ目は、戦没者慰霊に関する「地域性」について考えてみた。護国神社での慰霊顕彰祭は、数多くの関係団体が参画し、これらが組織的に運営されている様子は、現代における慰霊顕彰の理想的な形であろう。このことは、今日の福岡県護国神社が担う役割が、地域住民の方の意識の中に定着しているからではないかと推察する。この遠因としては、福岡藩が戊辰戦争の戦死者を功績として評価した時から始まったようにも思える。

国家や帰属する藩・県といった自治組織の平和や安定のために自らの命を賭して戦った英霊を奉る行事等に、福岡県民が積極的に参加している実状は、まさに明治時代から受け継がれている福岡の地域性によるものではないだろうか。

地域性の観点では福岡県の各所に、大東亜戦争に関係する記念館及び記念碑が多く整備されている。代表的な歴史資料館の一つである筑前町立大刀洗平和記念館は、護国神社より南東へ約三十キロ離れた旧陸軍大刀洗飛行場の跡地に建ち、管理運営されている。また記念碑に関しては、私事であるが、冒頭に述べた航空自衛隊春日基地で指揮官

として勤務していた時期に次のような経験がある。

予科練であった実父が昭和十九年十一月から二十年三月までの間、訓練に明け暮れていたであろう福岡航空隊の地を無性に訪れたくなったことがあった。

同航空隊は、関係資料から福岡県の北部にある糸島半島付近に存在していたことがわかり、現地を訪れてみた。すでに飛行場及びその施設の跡形は全くなく、比較的広大な平地に住宅地が造成されていた。中心部に、さほど大きくない公園があり、その一角に先の大戦中に同航空隊が存在したことが記された碑を見つけたことができた。

この碑は、自ら所属した部隊が歴史から忘れ去られることのないようにとの思いから、当該航空隊関係者が製作、設置されたものではないかと思ひ巡らせながら、生前の父への懐かしさも手伝って、しばらくその場を離れることができなかった。顕彰のための碑を公園内に設置するにあたっては、地域住民の方々による戦史の顕彰に対する深い理解がきつとあったはずである。

第53回特攻殉国の碑慰霊祭に参列して
専務理事 兼 事務局長 石井光政

令和元年5月12日(日)、長崎県東彼杵郡川棚町の「特攻殉国の碑」前庭にて慰霊祭が執り行われたので報告する。



特攻殉国の碑

「特攻殉国の碑」はこの地で訓練を受け、戦陣に散った震洋や伏龍等の隊員、約3000名を祀っている。この碑が有る川棚町は、戦前から佐世保海軍工廠で製造した魚雷を試験する「佐世保海軍工廠造兵部川棚魚雷遠距離発射場」(大正7年



震洋の復元模型

慰霊祭に参列する前に、川棚駅から近い町の郷土資料館を訪ねた。生憎閉館していたが、入口のガラス越しに復元された震洋(1型改4)を見ることが出来た。隣接する中央公民館に立ち寄ったところ、その掲示板に川棚の戦時遺構についての記事が載っている新聞が貼ってあったので読んでみた。魚雷発射試験場について書かれていた文章の中に、川棚町につい

設置)が置かれており、大戦中の昭和18年には海軍工廠も作られた、将に海軍と共に歩んできた町である。

元発射場の建物は爆撃を受け、外壁のみとなつているが、魚雷調整所の建物も、



魚雷発射場（奥は探信儀領収試験場）

て「町ぐるみで戦争に加担した過去に、行政も町民もふたをしてきた」との感想が書かれていたが、私はこれを見て悲しく感じた。川棚町は当時、町を挙げて国防に貢献したのであり、その歴史を負って受け取ることなく、胸を張って町の歴史を見つめてもらいたいと思つたからである。

魚雷を運搬し海へ卸すところの建物、航跡を追跡する観測所の建物も、当時の様子が分かるほどしっかりとおり、海軍の建設技術の高さを伺える歴史遺産であった。

慰霊祭斎行場所には開始30分前には到着し、廣川英雄総代にご挨拶の後、殉国の碑にお参りし、資料館を拜見させていただいた。式は定刻14時に開始。4月に海上自衛隊佐世保新隊員教育隊に入隊したばかりの初々しい新隊員による軍艦旗掲揚から始まり、国歌斉唱、黙祷、廣川総代等の慰霊の辞の奉読、参加者の献花、同期の桜（碑の有る新谷地区に合わせた新谷パージョン・新谷地区は部隊の多くが存在し、碑の建立維持も新谷地区の方々の手厚い庇護の元に行われている）を全員で合唱して15時20分、解散となった。

今年の慰霊祭は、ご遺族、ご来賓、元隊員の方をはじめ、地元住民の方、佐世保海上自衛隊隊員、陸上自衛隊相浦駐屯地等からの現職の自衛隊員を含め約200名の方が参列された。気温は高かったものの、海風が心地よく、爽やかな中、厳かな雰囲気で行われた。地元川棚町の特攻隊員に対する慰霊の気持ちを強く感じた慰霊祭であった。



「若櫻の碑園」

奥が若櫻の碑、左右に予科練各期の慰霊碑

令和元年5月19日（日）、三重海軍航空隊跡地「若櫻の碑園」（三重県津市香良洲町）において「第52回 三重海軍航空隊 飛行予科練習生戦没者 三重海軍航空隊戦没者 若櫻の碑慰霊祭」に参列した。「若櫻の碑」は三重海軍航空隊関係者により昭和44年に建立され、その園内には「若櫻の碑」を囲み、三重海軍航空隊で教育訓練を受けた予科練各期の慰霊碑十数基が建てられている。

第52回若櫻の碑慰霊祭に参列して
理事 鮎田 英一

当日朝は、伊勢湾から低い雲が流れ込み雨が時折降っていたが、昼前には雲も抜け穏やかな青空が広がっていた。慰霊祭の時は、毎年、不思議と好天に恵まれるとのことである。



鈴鹿海軍航空隊の点鐘

午前11時、開催の辞とともに祭典開始を告げる六点鐘が点打され、陸上自衛隊第三十三普通科連隊ラッパ隊による旧陸海軍ラッパ譜「君が代」の吹奏のもと、軍艦旗が掲揚された。点鐘（時鐘）は、鈴鹿海軍航空隊の由緒ある鐘であり、戦後長らく行方不明であったところ、昨年、偶然に鈴鹿市内で見つかった。鐘を吊る点鐘台は、鈴鹿海軍航空隊の旧施設から昭和52年に若桜の碑園に移設されたものであり、今般七十数年ぶりに合体を果たしたとのことである。また、軍艦旗は、2年前、慰霊祭に参列した海上自衛隊試験艦「あすか」から寄贈された真新しい自衛官旗であった。

始めに、詰襟・白の礼装に身を包んだ自衛隊三重地方協力本部の浅川孝一（あさか たかひ）尉が碑前に献花し、神事へと移った。神事は、香良洲神社神職による修祓、祭主一拝の儀、降神の儀、献饌、祝詞奏上の後、祭主の玉串奉奠と進み、ラッパ隊による「国の鎮め」が吹奏される中、主催者代表の香良洲神社氏子総代を始めとして、後援会、来賓、旧若桜顕彰会、御遺族の方々が玉串を奉奠した。続いて、撤饌、昇神の儀、祭主一拝の儀へと進み、神職が退下した。

この後、主催者代表挨拶として、香良洲神社氏子総代会長の木下正治様（きのした しょうじ）から「すべての御霊に哀悼の誠を捧げ、ご遺族の安寧をお祈りします」とのお言葉があった。後援会等代表として、三重県隊友会の会長・三石浩夫様（みつし ひろお）から「11年前に若桜顕彰会から若桜の碑を引き継いだ、毎月続けてきた清掃奉仕はこれからも隊友会のある限り続けて参ります」との力強いご挨拶があり、また、旧若桜顕彰会・予科練乙飛21期の今井昭司様（いまい しょうじ）からは、香良洲神社と隊友会への感謝の辞に続き、「15歳で入隊し17歳の夏を迎え、特攻艇で出撃するつもりであった。昭和20年8月15日、三重空練兵場に総員集合

を命じられ、紆余曲折を経て多くの同期と共に軍用列車で館山航空基地へと移動し、8月下旬に同地で解散となった。」と、終戦時の混乱に満ちた日々の思い出などが語られた。

次に当顕彰会理事長からの追悼文を私が奉読し、慰霊電報の披露、三重県隊友会相談役の青木正隆様（あおき まさたか）による奉吟と続き、最後に参列者総員により「三重海軍航空隊歌」が奉唱され、閉祭の辞を以て慰霊祭は終了した。

慰霊祭前に訪れた、若桜の碑園に隣接する鉄筋コンクリート3階建ての「津市香良洲歴史資料館」は、昭和55年、予科練関係者の寄付浄財により「若桜会館」として開館した。平成10年、香良洲町に寄贈され、現在は津市が保有管理している。三重海軍航空隊には、昭和17年8月の開隊から終戦までの間に航空機搭乗員の基礎訓練を受けるため、約38000名の若者が入隊した。歴史資料館3階の三重海軍航空隊遺品室には、この地で学んだ予科練習生と家族の手紙、特攻隊員の遺品、遺書、遺影等が整然と保管・展示されている。2階には津市の空襲被害など戦時下の暮らしが紹介されており、これら多くの貴重な資料は子供たちの教育学習にも活用され、歴史資料館を訪れた人々



津市香良洲歴史資料館

は、若櫻の碑に参拝することを常として
いるという。
本慰霊祭は既に52回目を迎えたが、その
陰には香良洲神社氏子の方々を始めとす
る地域住民、元隊員・家族の旧若櫻会、
ラッパ隊を派遣した久居駐屯地を始めと
する陸海空3自衛隊の部隊・機関、三重
県隊友会や三重県水交会などの自衛隊
会等、関係者の皆様の真摯なご努力があ
る。今後とも、この密接な支援助協力体制
が受け継がれる限り、本慰霊祭は整齊と
厳粛に斎行され続くことであろう。

第69回関西白鷗遺族会慰霊祭

副理事長 岩崎 茂

今年も京都霊山護国神社で5月19日
(日)に第69回関西白鷗遺族会慰霊祭、
そしてこれに引き続き第8回「あゝ特攻
勇士之像」慰霊祭が厳粛に執り行われた。
慰霊祭に先立ち10時30分から海上自衛隊
舞鶴航空基地第23航空隊所属の自衛官ラッ
パ隊)の支援の下、軍艦旗掲揚が行われ、
この後、本殿祭が開始された。

本殿祭に於いては、最初に「関西零戦
搭乗員会」の代表者による祭文奏上、次
に主催者である関西白鷗遺族会の山田正
克会長が祭文を奏上され、この後に私が
藤田特攻隊戦没者慰霊顕彰会会長の追悼
文を代読させて頂いた。当日は天候にも
恵まれ、100名を越える参加者がある
中で本慰霊祭は粛々と執り行われた。

この本殿祭の後、参加されたほぼ全員
が境内の「あゝ特攻勇士之像」の前に
移動し、特攻の慰霊祭が行われた。この
際、私の方から「あゝ特攻勇士之像」の
建立経緯、全国の護国神社への寄贈状況
等を説明させて頂いた。

そして、その後、先ほどの海上自衛官
による軍艦旗降納を行い、同境内の「昭
和の杜」に移動し碑前祭を行い、霊山護

国神社での全ての慰霊行事を終了した。
そしてこの後に齋館にて懇親会が行われ
た。この懇親会でも私に発言の機会が与
えられたので、私は特攻隊戦没者慰霊顕
彰会の現状等を説明させて頂いた。

この一連の慰霊行事は関西白鷗遺族会
の主催ですが、全国の白鷗遺族会の慰霊
祭が廃れる中、ここ京都霊山護国神社で
毎年慰霊祭が行われているのは、関西白
鷗遺族会の山田正克会長の慰霊行事を通
じて御英霊方々の思いを後世に伝えよう
とする熱い思いと強い意志をひしひしと
感ずる事ができた。そしてこの関西白鷗
遺族会と慰霊祭が長く継続し維持されて
いるのは、山田会長の強いリーダーシッ
プと山田会長を支える方々の結束により
成り立っているものと感じた。そして今
後も長く継続されていくものと確信した
次第である。

第9回千葉県特攻勇士之像慰霊祭

副理事長 岩崎 茂

令和元年5月26日11時から快晴の天候
に恵まれた中で、千葉市中央区に所在す
る千葉県護国神社内で「特攻勇士之像慰
霊祭」が厳粛に執り行われた。今年の特
攻隊戦没者慰霊顕彰会からは私のみの参
加であったが、地元の隊友会、偕行会、

東葛偕行会、水交会からの参加を頂き執り行うことが出来た。

この慰霊祭の慰霊対象は千葉県出身の特攻隊員138名(陸軍49名、海軍89名)である。この特攻勇士之像は、平成23年5月26日に「千葉県特攻勇士之像 建設実行委員会(委員長 白井日出男 様)」により建立されたもので、以降毎年この慰霊祭は建立された5月26日に行っている。地域の自治体は関与していないものの、今後もこの慰霊祭は継続して頂けるものと思う。

この特攻勇士之像の土台の裏側には建設委員長 白井様のお言葉が記載されている。此処に紹介したいと思います。

「特別攻撃隊として出撃 散華された多くの千葉県出身英霊の遺徳顕彰のため 公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会 又靖国神社の御支援 御協力のもと、千葉県下遺族 戦友 崇敬者 崇敬団体 から寄せられた真心籠る浄財を以て茲に ― 千葉県特攻勇士之像 ― を謹んで建立する。」

来年以降も5月26日に行われますので、千葉市周辺にお住まいの方、又はこの周辺を偶然にも探索される方等々、式典そのものは30分程度で終了いたします。お気軽にご参加くださいますようお願い申し上げます。

令和元年筑波海軍航空隊慰霊の集い

編集長 金子 敬志

令和元年5月26日(日)、茨城県笠間市「茨城県こころの医療センター」敷地内の慰霊碑「筑波海軍航空隊ここにありき」の前で執り行われた「令和元年度筑波海軍航空隊慰霊の集い」に、当顕彰会を代表して水町理事とともに参列しましたので、その概要と所見を報告する。

一 慰霊祭の概要

筑波海軍航空隊は昭和9年6月練習機による操縦教育を開始、昭和19年3月から零戦による戦闘機操縦者教育、昭和20年5月からは紫電戦闘機による実戦部隊となり同年8月終戦。

筑波海軍航空隊を巣立った搭乗員の殆どが戦死、特攻隊員として散華された方も多数いるが、ここで編成され沖縄戦に出撃して散華された「筑波隊」の隊員だけでも55名になる。

平成11年、これら戦没した隊員の鎮魂と恒久平和を念じて「筑波海軍航空隊ここにありき」の慰霊碑が建立された。

それ以来毎年慰霊祭が執り行われ、今回は20回目となる。

慰霊祭は10時30分から11時50分の予定で行われた。

式次第は

- ・ 開式の辞
- ・ 君が代演奏
- ・ 黙祷
- ・ 会長挨拶
- ・ 慰霊の言葉
- ・ 御来賓挨拶
- ・ 献花
- ・ 手記朗読
- ・ 奉納演奏

慰霊祭終了後、場所を筑波海軍航空隊記念館の新展示場ホールに移して懇親会が行われた。懇親会は14時にお開きとなった。

二 所見

筑波海軍航空隊記念館については、会報124号40ページからの「筑波海軍航空隊記念館を研修して」に詳細が掲載されているので割愛するが、その際、毎年慰霊祭が行われている事を知る事になり、顕彰会として今回初めて参列させて頂く事となった。

慰霊碑は、ここ茨城県立こころの医療センターの正門、かつての隊門の近くに建立されている。

当日の参列者は、ご遺族、元隊員、ご来賓等約90名であった。

ご来賓には、笠間市長、同副市长、石岡市副市长、茨城県議会議員、笠間



「慰霊の言葉」を述べる柳井和臣氏

市市議員など10数名と地元自治体関係者が多数参列していた。「慰霊の言葉」は第14期飛行予備学生柳井和臣氏が述べられたが、今年97才とは思えないしっかりしたお話ぶりとはダンディーなお姿が印象的であった。今年、初めて陸上自衛隊勝田駐屯地施設学校の音楽隊の支援を得られる事となったそうで、慰霊祭に重厚さを加えていた。

地元自治体や自衛隊の支援等があるので、今後ともこの慰霊祭は継続されるものと感じた次第である。



「哀惜の碑」とその前に設けられた慰霊祭会場

**第49回指宿海軍航空基地「哀惜の碑」
慰霊追悼式参列報告**

理事 大穂 園井

令和元年5月27日(月)、鹿児島県指宿市で開催された「第49回指宿海軍航空基地 哀惜の碑慰霊追悼式」に石井専務理事と共に参列したので報告する。

基地跡は、現在国立公園となっており、目の前に鹿児島湾(錦江湾)を臨み、背

には四季の花々が美しい魚見岳を控える。慰霊碑に隣接した海岸には国民休暇村が建ち、全国からたくさんのお客が訪れる自然豊かな観光地となっている。

指宿海軍航空基地は、水上機の基地として、昭和19年1月1日に開隊、第四五三海軍航空隊のベースとなり、12月25日、第九五一海軍航空隊に統合された。

翌、昭和20年4月、特攻機の不足から水上機も転用されることとなり「水上機神

風特別攻撃隊(水上機特攻)」が編成された。

4月29日より7月3日までの間に、こ指宿基地より出撃した隊は「琴平水心隊」「第一魁隊」「第二魁隊」「琴平水偵隊」「第十二航空隊二座水偵隊」、併せて44機、隊員は82名に上る。慰霊碑には、特攻による戦没者、訓練による殉職者、B29の爆撃による戦死者、併せて192名が祀られている。

かつて防空壕のあった小高い丘の上には慰霊碑は建立され、碑文にはこう記されている。

「君は信じてくれるだろうかこの明るい穏やかな田良浜がかつて太平洋戦の末期本土最南端の航空基地として琉球孤の米艦隊に対決した日々のことを拙劣の下駄ばき水上機に爆弾と片道燃料を積み見送る人としてないこの海から萬感をこめて飛び立ち遂に還らなかつた若き特別攻撃隊員が八十二人にも達したことを併せて敵機迎撃によって果てた百有余人の基地隊員との鎮魂を祈ってここに碑を捧ぐ」

朝方まで降りしきっていた雨が止み、新緑の風が薫る中で始まった式典には指

宿市副市長をはじめ、ご遺族、海軍ご関係者、鹿児島県議会・市議会議員、自衛隊鹿児島地方協力本部に所属する陸上自衛官、海上自衛官、国民休暇村指宿支配人、地元有志の方々など、81名の方がご参列。

顕彰会会長である指宿市長(代読)は「現在の指宿市があるのも祖国の礎となつた御霊のおかげである。この悲しい歴史と想いを若い人たちに残していきたい」と述べられた。



国民休暇村館内に展示されている説明パネル

美しい白菊の献花に続き、琴平水心隊(詫間空)に所属しておられた愛知県出身海軍二等飛行兵曹 野村龍三氏の「遺言書」が朗読された。そこには「生を受けて十八年何らなすことなく不幸に不幸を重ねて参りました事、お詫び致します。しかし乍ら今や陛下の御楯にこの身を捧げ奉ることのできましたこの光栄も、ひとえにご両親様のおかげであります。特別攻撃隊愛機と共に、搭乗員として死を共にする事のできる無上の光栄を飾ることが

できました。龍三、よくやってくれたと一言でもよいから言って下さい。出撃一時間前 ご両親様 昭和二〇年四月二八日」とあり、参列者の誰もが哀惜の念に堪えなかった。

指宿吟詠会・指宿吟松会様は、美しい洋装のご婦人方が朗々たる笛に合わせて、第十二航空戦隊二座水偵隊（天草空）に所属しておられた鹿児島出身の松永篤雄二飛曹の辞世の3句を献詠された。

「紅唇固く結んで 殉国を誓い 布に母の名を書して 我が腹に巻く」

「悠久の 大義を生きん 若桜 只勇みゆ征く 沖繩の空」

「轟音ひたすらに翔ける 沖繩の空 銷魂 消ゆる処 残月在り」

最後のあいさつで、隣接する国民休暇村の館内に、この水上機特攻の説明パネルが展示されている事が告知されたため、追悼式後も参列者の方々と休暇村の中であたたかい交流を持てた事に心より感謝申し上げます。

全国からこの地に保養に訪れる多くの方々が、水上機特攻を含む特攻隊の存在を知り、特攻で亡くなられたご英霊に思いをはせて下さることを切に望む。

第52回予科練慰霊祭に参列して

理事 鮎田 英一
編集長 金子 敬志

令和元年6月2日（日）陸上自衛隊武器学校内の雄翔園で執り行われた「第52回予科練慰霊祭」に顕彰会を代表して鮎田理事と金子編集長が参列させて頂いたので概要と所見を報告する。

1 概要

当日は最寄りのJR土浦駅から送迎のバスが運行され、参列者の便が図られていた。

入場は武器学校正門からではなく隣接する「予科練平和祈念館」側に入場口が設けられ、その前の受付で受付を済ませて入場した。

入場口から会場の雄翔園はほんの間近であり、園内の「予科練の碑」の前に祭壇が設けられていた。

(1) 慰霊祭の日程

11時～12時10分
(2) 慰霊祭の式次第

- ・ 開式の辞
- ・ 国旗掲揚
- ・ 儀仗（弔銃）
- ・ 献火
- ・ 献唱
- ・ 奉詠
- ・ 式辞

- ・ 御来賓挨拶
- ・ ご遺族の言葉
- ・ 遺書朗読
- ・ 海ゆかば奉唱
- ・ 奉納行事
- ・ 閉式の辞



「予科練戦没者慰霊碑」

慰霊祭は地元有志パイロットによる日の丸飛行隊の慰霊飛行が行われた後、実行委員長である海原会副理事長酒井省三氏の開式の辞により開始された。陸自武器学校隊員による国旗掲揚、海自下総教育航空群隊員による儀仗

(弔銃)、また、地元阿見町長による御来賓挨拶や地元婦人会有志による奉納舞踊など、地元と自衛隊が一緒になって実施しているのが感じられる慰霊祭であった。

(3) 直会

慰霊祭終了後、13時から駐屯地体育館において直会(懇親会)が行われた。直会は14時の定刻をもってお開きとなり、第52回予科練慰霊祭は終了した。(金子敬志 記)

所見

予科練戦没者慰霊碑(兵士二人像)のある雄翔園及び予科練戦没者の遺品・遺書・遺影を展示する隣接の「雄翔館」は、陸上自衛隊武器学校の敷地内にあつて一般の方々も訪れることができる、美しく整備された慰霊顕彰施設である。

雄翔園における慰霊祭は、公益財団法人海原会主催であり、立派な慰霊祭を長年にわたり実施するにあたっては、海原会の長年のたゆまぬ努力はもとより、遺族会・同窓会、自衛隊、阿見町などの地方公共団体、地域住民及び少なからぬ有志による支援協力の見事な連携がある。概要に記されたように、各方面からの来賓多数の顔ぶれや地元婦人会による奉納舞踊などは、その一例である。

雄翔館では、海原会が本慰霊祭に合わせて、特別展示「70年目の奇蹟 見えて

きた兄の最期 乙飛18期・山岸啓祐少尉実弟 山岸修次氏所蔵遺品展」を開催していた。山岸氏は本慰霊祭で御遺族の言葉を述べられた、御遺族代表者である。兄・山岸少尉は、昭和20年4月12日、艦爆八幡護皇隊神風特別攻撃隊として沖縄方面に出撃したが、最期の様子ははっきりとせず、長い間、御遺族も「敵の砲弾にやられて海の藻屑と消えた」と思い込んでいた。ところが戦後70年目に東京白鷗遺族会から山岸氏に連絡があり、少尉が同日1450、沖縄南東海上で米戦艦テネシーに見事体当たりを遂げたという事実を知る。特別展示では、最後の消息が判明するまでの様々な経緯と、終戦後の御遺族それぞれの思いを綴った手記やインタビュービデオなどが展示されていた。山岸氏は、この日、曾孫も含め一族36名で参列されており、戦後の長い歲月における御遺族のつながりの強さを感じられた。

雄翔園と雄翔館は、来賓挨拶をされた陸上自衛隊武器学校長によれば、予科練戦没者を祀る慰霊顕彰の施設であるとともに、ここに勤務する隊員の精神教育、修養の聖地にもなっているという。また海上自衛隊も予科練にルーツを持つ航空学生制度を有していることから、教育の一環として、数年前より現役の航空学生を山口県の教育部隊から慰霊祭に派遣し

ており、今回も代表学生により「若鷲の歌」が献唱されていた。遺族・同窓関係者が高齢化する時代であるが、戦没者に対する慰霊顕彰の火を燃やし続けるためにも、自衛隊員など、多くの若者にこのような慰霊顕彰の施設や機会のあることを周知し、研修や参列をしてもらう努力の大切さを改めて感じた慰霊祭であった。(鮎田英一 記)



海上自衛隊航空学生による献唱

五 攻撃法

(1) 二座水偵特攻機ハ主トシテ暗夜月夜若ハ薄暮黎明時使用ナルヲ以テ特ニ困難トナル。莫ハ目標捕提ニ其ノ大半繫リ有リ。

克ク天象地象ヲ利用成功スルヲ見失ハザルヲ所要ナリ。

(2) 接敵運動、敵機探照灯回避等ニ提レ攻撃時機ヲ失ヒザルヲ要ス。尚天象地象ニ提レ過ビザラズト

(3) 夜間戦闘機ハ多数配備ニ得テ以テ其ノ弱莫ニ乘ジ急ニ速突撃ス

(4) 攻撃配備ハ敵ヲ四周ヨリ包圍シ異方向ヨリ接敵殺到ニ攻撃ヲ加フル如クスルヲ可トスルモ敵情我ガ兵力我ガ執ルべき攻撃法天象地象等ヲ考慮シ定ルモノトス

(5) 攻撃目標照準ニ莫ハ夜間ニ於テハ莫然ト見ユルヲ以テ常中ニ中心ヲ照準スルヲ可トス

(6) 夜間無照明ノ艦船攻撃法ヲ續練研究スルヲ要ス

(7) 概テ同時攻撃ナルヲ以テ異目標ナルヲ要ス

(8) 雲高低キ時、進入高度ハ雲ノ下際トシ極力高位ナルヲト

(1) 敵ヲ発見シ得ズ又ハ攻束ヲ実施シ得ズルニ場合、處置
 の兵力損耗ヲ来サル編隊見張・警戒・天候等ニ細心ノ注意ヲ拂
 ヒ、歸投スルニト
 (2) 突進基地空襲中ノ慮アル場合ハ他、安全ナル基地ヲ選定シ着
 水後狀況速報スルニト
 (3) 安全解除ナシタル場合ハ着水前充分右傾ケ(水平飛行ノ一)
 適當ノ場前ニ投下スルニト(投下不可能實驗未済ナルモ可能ト思考ス)

9 ページ
五 攻撃法

(イ) 二座水偵特攻機は主として暗夜、月夜、若は薄暮、黎明時使用さるるを以て特に困難とさるる点は目標捕捉に其の大半繋がり有り

克く天象地象を利用成功するまで見失わざること肝要なり

(ロ) 接敵運動、敵機、探照灯回避等に捉れ攻撃時期を失せざるを要す 尚 天象地象に捉われ過ぎざること

(ハ) 夜間戦闘機は多数配備し得ざるを以て其の弱点に乘じ急速突撃す

(ニ) 攻撃配備は敵四周より包囲し異方向より接敵殺到し攻撃を加うるを可とするも敵情 我が兵力 我が執るべき攻撃法天象地象等を考慮し定むるものとす

(ホ) 攻撃目標照準点は夜間に於いては漠然と見ゆるを以て常に中心を照準するを可とす

(ヘ) 夜間無照明の艦船攻撃法を演練研究するを要す

(ト) 概ね同時攻撃なるを以て異目標なるを要す

(リ) 雲高低き時の進入高度は雲の下際とし極力高位なること

10 ページ

(ヌ) 敵を発見し得ず又は攻撃を実施し得ざりし場合の処置

(1) 兵力損耗を来さざる編隊、見張、警戒、天候等に細心の注意を払いつつ帰投すること

(2) 発進基地空襲中の處ある場合は他の安全なる基地を選定 着水後状況速報のこと

(3) 安全解除なしたる場合は着水前充分右に傾け(水平飛行)

適当な場所に投下のこと(投下不可能実験未済なるも可能と思考す)

参考事項

(1) 搭乗員ハ発進基地ニ進出セ、速ニ該基地ノ飛行場地勢、障礙物

天候等ヲ實質地ニ調査研究ニ夜間ノ発進ニ備スルコト

前進基地ニ於テハ殆ド訓練ハ實質施サズ、夜設等ハ敵情ニ依リ

使用セザルコト考ヘ、晝間ノ充分ナル慣熟ヲ必要トス

(2) 敵ノ艦船又ハ要地ニ近接セントスル際、彼ノ電探視界内ニ入ルヤ

之ヲ徹底的ニ妨害シ、飛行機隊ノ行動兵力等ヲ隠蔽スル

コトハ殆ド不可能ナリ

米國電探有効距離(對飛行機)

航空機用 四〇料

艦船用 一三〇理

(3) 編隊ニ基因スル燃料消費ニ留意ノ要有リ

発動マデノ消費時並ニ列機ノ発動機管制(減少率概不 $\frac{1}{10}$ 以内)

AC使用時機等

(4) 上空哨戒中ノ敵夜戦ハ概テ航空灯ヲ莫ク充分見張ヲ行ハ

バ、近接ヲ視認シ得、又行動ハ緩慢ニシテ三座機ヲ以テシテ退

三得

(ホ) 最適爆弾信管

九九式通爆信管丙 (0.3) 九九式通爆信管甲 (當隊使用予定)

右ナキ時ハ通爆信管使用ノコト、シ瞬発信管使用セザルト

(ハ) AGヲ使用シ ACヲ使用セザルハ航路巨離ハ $\frac{1}{15}$ トナル

(ニ) ALヲ使用シ ACヲ使用セザルハ更ニ $\frac{1}{15}$ 項ノ $\frac{1}{15}$ トナル

(ト) 重心点、移動 着水失速ニ至大、影響アリ研究ヲ要ス

重心点、前進許容量ハ 21% 迄可能 (但シ滑リ込ミ)

今 右 28% 実験済シ

(四) 爆装機浮キ (現特攻機ニ)

九五式水偵 180kt 零観 220kt (-250)

(三) 待機

(一) 特攻隊員ハ即時出発シ得ルヨリトシテ總給ヲ備ヲ完了シ心静カニ

待ツコト

11ページ
参考事項

- (イ) 搭乗員は発進基地に進出せば速やかに該基地の飛行場地勢、障害物、天候等を実地に調査研究し夜間の発進に備えること
- 前進基地に於ては殆ど訓練は実施されず夜設等は敵情に依り使用せざるを考へ昼間の充分なる慣熟を必要とす
- (ロ) 敵の艦船又は要地に近接せんとする際 彼の電探視界内に入るや之を徹底的に妨害し飛行機隊の行動兵力等を隠蔽することとは殆ど不可能なり
- 米国電探有効距離(対飛行機)
- 航空機用 四〇料
- 艦船用 一二〇埋
- (ハ) 編隊に基因する燃料消費に留意の要有り
- 発動までの費消時並びに列機の発動機管制(減少率概ね5/100以内)
- AC使用時期等
- (ニ) 上空哨戒中の敵夜戦は概ね航空灯を点じ充分見張りを行へば近接を視認し得 また行動は緩慢して三座機を以てしても避退し得

12ページ

- (ホ) 最適爆弾信管
- 九九式通爆弾信管丙(〇、二) 九九式通爆信甲(当隊使用予定)
- 右なき時は通爆信管使用のこととし瞬発信管使用せざるのこと
- (ヘ) (1) AGを使用しACを使用せざれば航続距離1/13となる
- (2) ALを使用しAC使用せざれば 〃 更に(1)項の1/1.5となる
- (ト) 重心点の移動 着水失速に至大の影響あり研究を要す
- 重心点の前進許容量は21%迄可能(但し滑り込み)
- 右 23% 〃 実験済
- (チ) 爆装機浮き(現特攻機にて)
- 九五式水艇180Kt(マイナス3.8度 零観220Kt(マイナス2.5度)
- (リ) 待機
- (1) 特攻隊員は即時出発し得るを旨として総準備を完了し心静かに待つこと

(2) 情況迫ルニ隨ヒ指導者ハ念一爲左ノ事項ニ就キ注意ヲ與ヘルニト

(1) 接敵

(2) 突撃

(3) 目標

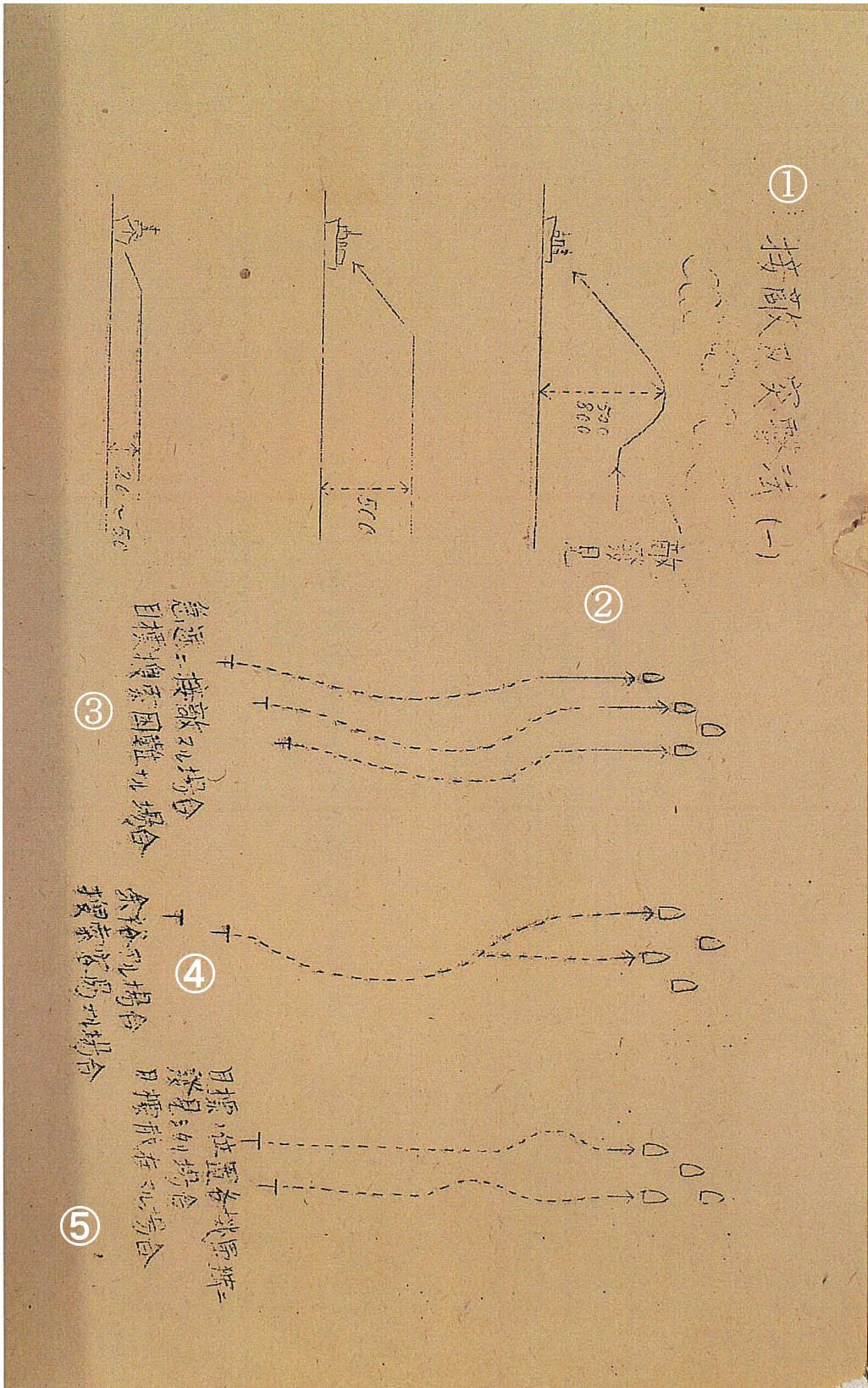
(4) 不時着基地ニ不時着後ノ處置

(5) 敵ヲ発見シ得ザリシ場合ノ處置

(6) 指揮官機故障ノ爲出發出来ザル場合ノ處置

隊内對機信号

臨語	信文
二連送	輸送船發見
七連送	敵機飛行機發見
十連送	突撃機ヲ見
九連送	歸



13
ページ

- 2) 情況迫るに随い指導者は念の為左の事項に就き注意を与えること
- (イ) 接敵
 - (ロ) 突撃
 - (ハ) 目標
 - (ニ) 不時着基地 不時着後の処置
 - (ホ) 敵を発見し得ざりし場合の処置
 - (ヘ) 指揮官機故障の為出發出来ざる場合の処置

隊内対機信号

略語	信文
ユ連送	輸送船発見
ヒ連送	敵飛行機発見
ト連送	突撃せよ
カ連送	帰れ

14
ページ

- ① 接敵及び突撃法 (一)
- ② 敵発見
- ③ 急速に接敵する場合
- ④ 目標搜索困難なる場合
- ⑤ 余裕ある場合
- ⑥ 搜索容易なる場合
- ⑦ 目標の位置各機単独に発見したる場合
- ⑧ 目標散在する場合

水上機特別爆装后飛行実験成績

機種	項目	重量重心点	離水秒時	燃料	バラスト	記事
九五式		220kg	巡 8kt減 H = 1000 F C = 110秒時	425立	10kg (5升) 30kg 席	爆装搭載
水偵		29%	21秒 H = 1000 F C = 110秒時	(A. L.)	30kg 席 160kg 後席	着水
零式		28(10kg)	21秒 H = 1000 F C = 110秒時	425立	160kg	同上
観測機		24.3%	21秒 H = 1000 F C = 110秒時	(87揮)		

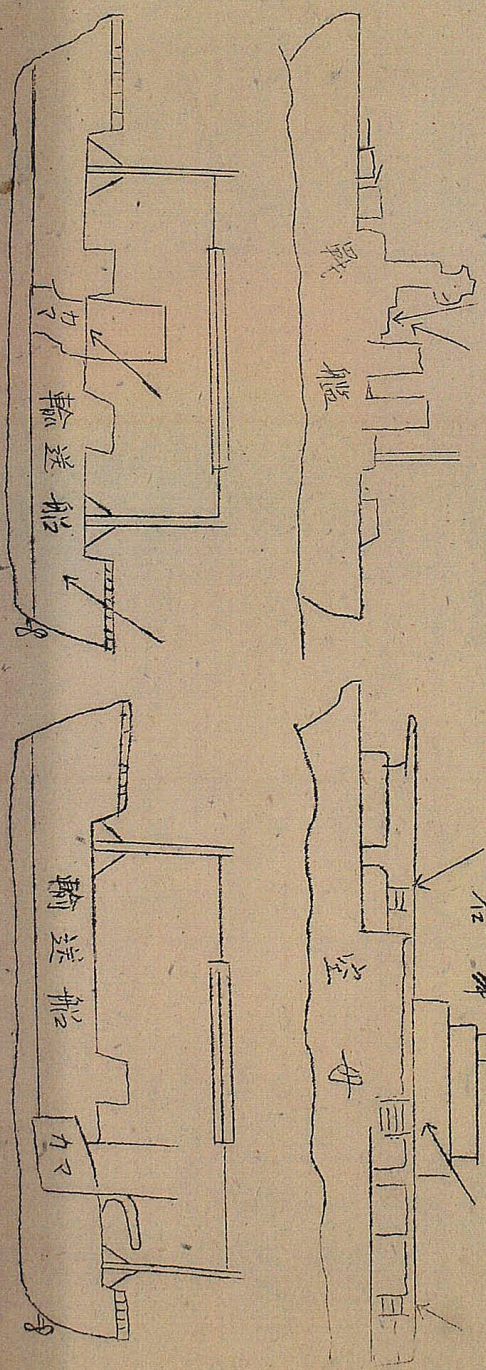
軍極秘

備考
 (一) 搭載爆弾 = 内24kg
 (二) バラスト = 爆弾 = 搭載24kg 場合ハ信管使用24kg
 (三) 信管ヲ附セザルハ 50% 誘爆セザル筈ナリ
 (四) 誘爆ハ威力ハ小ナリ
 (五) 25% 着爆弾撃角ノ問題
 (六) 撃角 30° = 1.60kt = 15%
 鋼板質微々
 鋼板質微々 = 相子安ナリ
 但シ敵輸送船ノ外板ハ 6~8% 至 10% 程度ナリ

2. 特攻機一覽表

機種	重量	最高速	機長 Hsp	離着水	制限重量	制限速度	爆装	乗員	ハコ外	除去物	燃料
95式	2100	150kt	300 / 2000gk	爆投下 不可	2100	180kt	25X1 6X1	1	70kg	29kgX1 通信機	300ℓ
零観	2850	190kt	450' / 400/125	同上	2850	285kt	25X1	1	150kg	同上	430ℓ

3. 有効な攻撃点



15 ページ

1 水上機特別爆装後の飛行実験成績

項目 種類	重量重心点	離水秒時	燃料	バラスト	記事
九五式 水偵	2200kg 27%	巡 8Kt減 H=1000 V=100 FC=110立/時 21秒	425立 (AL)	10Kg (左浮舟) 30Kg 後席	爆弾搭載 122着水 可能
零式 観測機	2800kg 24.3%	巡航、高速 共20Kt減 H=1000 V=120 FC=110立/時 22秒	425立 (87揮)	160Kg 後席	同上

1) 搭載爆弾に関する件

- (イ) バラストに爆弾を搭載する場合は信管を使用するを要す
- (ロ) 信管を附せざれば60%誘爆せざる算あり
- (ハ) 誘爆の威力は少なり

(2) 25番爆弾整備の問題

- (イ) 撃角30°にて160Ktにて15m/m鋼板貫徹す
- (ロ) // 100Ktにて15m/m鋼板貫徹に稍不安あり
但し敵輸送船の外板は6~8m/m 缶の部品が10m/m程度なり
(以下、判読不能ですの省略します)

16 ページ

2 特攻機一覧

項目 種類	重量	最高速	航続裡 H/SP	離着水	制限重量	制限速度	爆装	乗員	バラスト	除去物	燃料
95式	2100	150Kt	300 2000/95	爆投下 不可	2100	180Kt	25×1 6×1	1	70Kg	7.7銃×1 通信航法	3000
零観	2850	190Kt	450 400/125	同上	2850	285Kt	25×1	1	160Kg	同上	4300

3 有効なる攻撃点

(図の説明は省略します)

以上で終わります。

※ 文末になりますが、貴重な資料をご提供頂きました事に深く感謝致します。

海上挺進第四戦隊及び基地第四大隊

元隊員 中溝 二郎

海上挺進第四戦隊は、陸士五一期の金子昌功少佐が戦隊長となり、通称は暁第一六七八〇部隊であった。

中隊長は第一中隊高橋澄夫中尉（陸士五五期、十二月に大尉になる）第二中隊は赤星悟、第三中隊浜本正明の各少尉（何れも陸士五七期）であり、副官として松岡三郎少尉（幹候八期）、群長は船舶幹候隊出身一〇期の見習士官（二〇年一月少尉）、隊員は特幹一期生であった。戦隊は八月下旬から豊島基地で①の訓練に入り、九月十三日宇品で正式に編成を行なったが、他の戦隊に比べて出発が遅れ、爾後十一月十五日まで幸ノ浦の第一〇教育隊で訓練を実施していた。

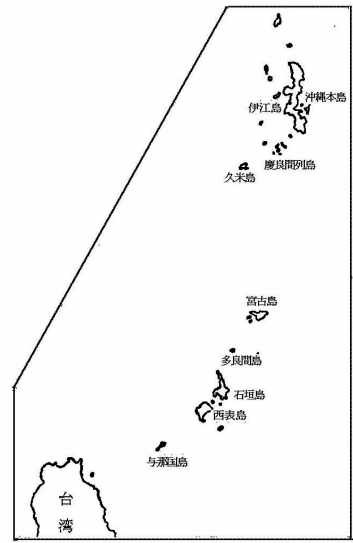
十一月十六日によく日昌丸にて宇品を發ち、門司で大讓丸に舟艇を積み替え、二十九日に出航、同日付で沖繩軍（第三二軍）に編入となった。

十二月二日に鹿児島港に到着、九日に鹿児島港を出て十四日に慶良間諸島中の第一戦隊の基地のある座間味島に上陸した。

以後同島の阿佐海岸で舟艇整備と訓練を行なっていたが、二十年一月七日に同島からまず本部と第二、第三中隊が先發

となり機帆船八隻に舟艇を分載して、任務地である宮古島に向うべく出發したが、折からの台風を避け、ひとまず慶良間西方の久米島に寄航した。

ところが、一月十一日、同島を出發して夜にかかった際、第三中隊所属の池田見習士官（この時は少尉？）以下の乗った船が爆発事故による火災を起し船は沈没し六名が戦没する事故が発生した。又、再び荒天となり、各船はバラバラに分散して航行することとなった。戦隊長の乗った船は多良間島に漂着し、後日ようやく宮古島に到着できた。然し、第三中隊の浜本少尉の指揮する船は石垣島に、他の船も四日間漂流の後、最南端の与那嶺島等に漂着し、同地で機帆船を修理した後、西表島（イリオモテ）から石垣島に到着した。更に多良間島等を経て、宮古島に向う予定であったが、この時、沖繩



また、他の一隻も多良間島附近で座礁し、隊員数名は①数隻を降ろして多良間島に上陸、約一カ月後迎えに来た漁船に曳航されて宮古島に上陸した。

更に第二中隊の主力は、赤星少尉ら将校三名を含めて二十一名が、四隻位に分乗していたが、これは台湾に漂着する結果となり、遂に宮古島に廻航する機会に恵まれず、やむなく台湾に止まったままとなった。（後述）

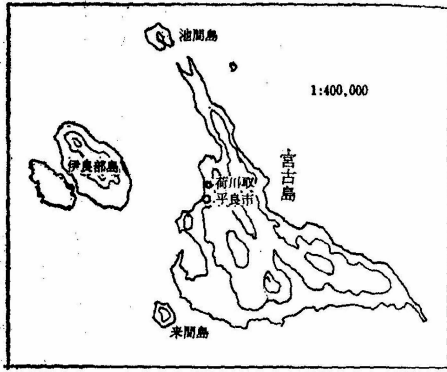
一方後發組となった第一中隊は、一月十八日夜数隻の機帆船に分乗、座間味島を出發、久米島に一時寄港した後十九日深夜宮古島に向かったが、荒天となり船団はバラバラに分散して航行することとなった。途中一月二十一日、二十二日の宮古島周辺の空襲により、一隻（竹丸）が銃撃を受けて炎上沈没、戦隊員のうち一名は救助されたが他の五名は戦死した。（二月二十二日多良間島東方六海里海上）

他の船は航路を誤って石垣島方向に進んだ船もあり、分散していたが二十一日頃には宮古島平良港に到着した。平良港では米軍の空襲が盛んであったため、之を避けて夜間に入港したが、先に入った一船は空襲に巻き込まれて銃撃を受け若干の死傷者があったようであるが、戦隊員に被害はなかった。

その後台湾在留となった者を除く第二中隊の一部も加わって、一月に至って六十五名が、ようやく任務地宮古島に集結を終えた。

以後主として、荷川取台陣地の洞窟内に舟艇を収容し、訓練を行っていた。

宮古島近海は珊瑚礁が多いので、安全に出撃できるよう水路を確認しておく必要があり、二月二十三日に大発二隻によ



り北方水路を調査中、四発(コンソリデーテツトB24と思われる)の米軍機の銃撃を受け、大発は沈没し、戦

隊員のうち一名戦死、一名重傷(三月十日死亡)、基地隊員七名の戦死者と二十数名が負傷する被害があった。

生存者は近くの池間島に泳ぎ着き、後日漁船により宮古島に帰った。

宮古島は米軍の上陸はなかったが、五月四日 英太平洋艦隊の戦艦キングジョージ五世をはじめ戦艦二、巡洋艦五、駆逐艦十一、計十八隻により約三十分にあたる艦砲射撃を蒙ったが、大きな被害はなかった。

又、三月二十三日より米軍の本格的空襲が始まり、四月、五月、六月には連日の如く攻撃が行われた。攻撃の目標は主として飛行場に向けられたが、一部は陣地、兵舎、民間建物、部落等にも向けられ、人畜の被害もかなり出た。

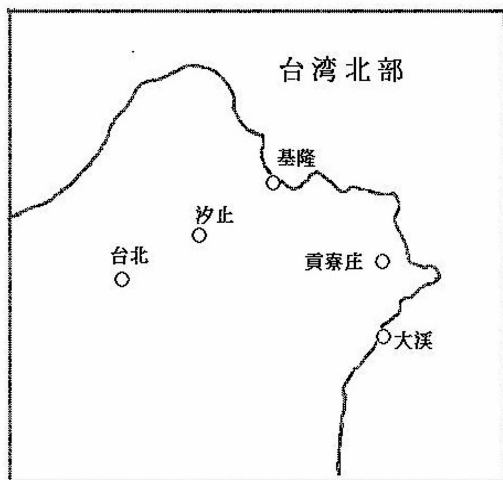
戦隊員も五月に空襲により一名が戦死した。その他九月になって一名が宮古陸軍病院で病死した。

一方台湾に漂着した四隻は北部の東海岸大溪等の周辺に分散して到着したが、基隆において赤星中隊長が全員を掌握し、此処に待機して宮古島に行く船舶の交渉を行なった。

その結果、漸く第二東海丸と決定し、舟艇その他の機材を積載したところ、英国の機動部隊の基隆攻撃が迫っている中で、在基隆船舶は上海方面に退避するこ

ととなり、基隆港を出発したが、船団を狙う米空軍、潜水艦等の攻撃を避けるため、乗船した船は単独にて、金門島附近において退避し、四日後、第一〇方面軍の命により基隆に引き返した。

その後は宮古島への航行は危険で不能となり、やむなく独立中隊として方面軍直轄部隊(通称台一六七八〇部隊)となり、歩兵一〇中隊、整備小隊の配属を受け、台北州東部の貢寮庄に陣地を構築し、宜蘭平野に対する敵の上陸に備える事になった。



終戦後、赤星中隊長は隊員約四名とともに司令部に転属となり、残員は近隣部隊の指揮下に入ったが、汐止めに居た第

二一戦隊に転属となった者もいる。
この結果同戦隊の被害情況は將校二名、
隊員二十一名の合計二十三名の戦没者が
あった。

海上挺進基地第四大隊は、通称暁第一
六七九一部隊と称し、大隊長は七期の特
別現役志願將校出身の西江重樹大尉が任
命され、十九年八月三十一日に編成を終
った。

大隊は極めて早期の九月五日に博多港
を出発して、同月七日には宮古島に着き、
同地で基地設営と陸上戦闘の準備に当た
っていた。

こちらも前記のように二十年一月二十
二日の米軍艦上機の空襲の際に、機帆船
に乗船中であつた菊地中尉以下戦死者数
名を出した。

又、宮古島に到着した基地大隊員数は
約二百数十名と云われ、その内戦没者は
六三名、戦死者は一〇名であつた。

海上挺進第五戦隊及び基地第五大隊

元隊員 中溝 二郎

海上挺進第五戦隊は、暁第一六七八一
部隊と称し、十九年八月下旬から豊島基
地で訓練に入っていたが、九月十五日宇
品で正式に編成された。

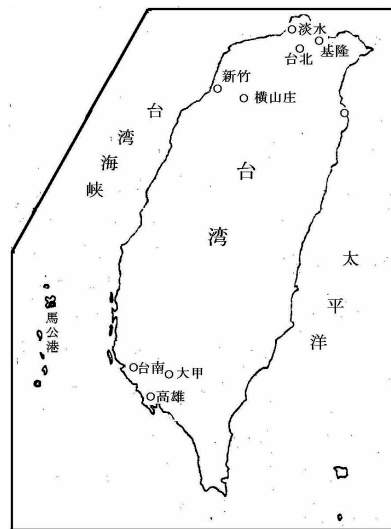
戦隊長は陸士五三期の近藤三男大尉、

第一中隊長小西博少尉、第二中隊長寺野
榎太郎少尉、第三中隊長三崎信行少尉
(何れも陸士五七期)で、戦隊本部付と
して橋爪績少尉がおり、群長は一名が豊
浜の船舶幹候生隊他は仙台予備士官学校
出身幹候一〇期の見習士官(二十年一月
少尉)、隊員は特幹一期生であつた。
戦隊は九月二十三日、輸送船御月丸
(第三中隊)と白妙丸(本部・第一中隊・
第二中隊)に乗船して門司を出港、同時
に同日付で第一四方面軍(比島派遣軍)
に編入された。

戦隊の赴任予定地は、最初はルソン島
北部のアパリとされ、後にリンガエン湾
に、更にルソン最南端にあるレガスピ
市に近いアルバイ州カマリグ地区とされ
ていた。

船団は十月初め、台湾に着いたが、そ
の月の五日米機動艦隊の沖縄・台湾方面
への接近の報を受け、兵員は高雄に上陸
し、輸送船は一部の戦隊員を監視要員と
して船内に残し、舟艇を積載したまま、
澎湖島の馬公港に退避のため碇泊中に、
十月十二日以降展開された台湾沖航空戦
となり、碇泊中の輸送船団のほとんどが、
米艦上機群による雷撃を受けて沈没し、
乗船中の陸軍部隊の多くの人員と、戦隊
の舟艇の全部を失うに至つた。
監視要員であつた戦隊の人員は海軍艦艇

に救助され、十二月になつてようやく高
雄に帰着し、本隊に合流した。



このあと十二月に受けた空襲により、
一名が受傷し後に死亡した。

舟艇喪失のため戦隊は、以後も引続き
高雄にあつて舟艇再受領後に比島に向う
べく準備待機していたが、舟艇生産や海
上輸送の悪条件のため、内地からの舟艇
補充が遅れ、比島に向け出発できないで
いるうちに年を越し、二十年二月になつ
て海上輸送の困難さにより、比島に渡航
不能は明らかになつたため、二月二十一
日陸軍第五八九号が出され、そのまま
台湾軍(第一〇方面軍、軍司令官安藤利
吉大將)に転属されることになり、又若
干の舟艇の補充を受けることになつたが、
後の補充の見透しがなく、隻数不足のた
め約三十名は台南に所在した船舶工兵第

三〇連隊に転属した。

因みに船舶工兵第三〇連隊では、米軍の台湾上陸に備えて舟艇(大発)の両舷に魚雷をロープで結束し、夜間攻撃を前提にこれを目的艦船に発射する特攻作戦を計画、訓練していた。

又八名が第二一戦隊に転属となった。(高橋、畑野両少尉以下八名。その後、高野少尉は元の第五戦隊に復帰、畑野少尉は船工二八連隊に転属)

戦隊は舟艇の受領を台南州新豊郡仁徳庄大甲にて行ない、(二五戦隊の駐留場所)二層行溪河岸に舟艇秘匿を行ない、同地で夜間訓練等を行なっていた。

五月下旬に人事異動があり、第二四戦隊長稲田満徳大尉は第九師団参謀部付となり、六月一日戦隊長近藤三男大尉が第二四戦隊長を兼務し、合わせて第二四基地大隊も近藤戦隊長の指揮下に入った。

その後、七月二十日になって、第一〇方面軍作戦計画変更に伴う移動命令を受けた。すなわち、沖縄戦終結後の台湾北部戦備強化のため、戦隊を新竹附近に移動し、第九師団に配属されることとなったのである。戦隊は移駐命令を受けて新竹州竹東郡横山庄沙坑(新竹市海岸から二十キロの山中 第二四戦隊と同じ所)に移転し、舟艇は艦砲射撃や空襲による破壊を避けるため、山間地の用水池に浮

べ、樹木等で擬装を施していたが、同日で終戦となった。

同戦隊の被害者は前記の戦死一名と、八月十五日に現地で、九月に広島で戦病死一名の三名を出したのみであったので、海上挺進隊としては最も幸運に恵まれた隊であったといえよう。

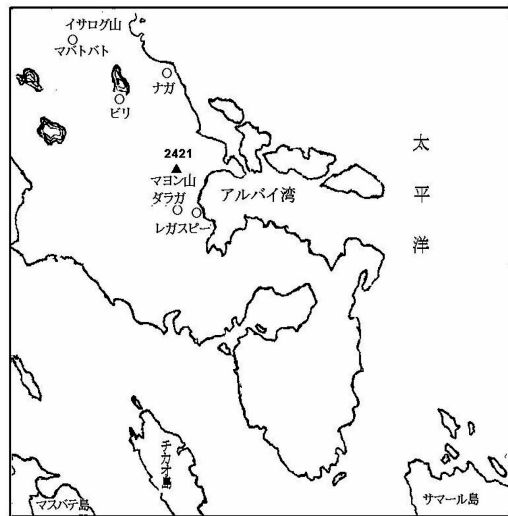
海上挺進基地第五大隊は、十九年八月三十一日宇品の船舶廠で通称暁第一六七九二部隊として編成された。

大隊本部、第一、第二、第三中隊と整備中隊の合計約九三〇名で、大隊長は石原岩根少佐、大隊長代理を勤める第一中隊長は荒木中尉で第二中隊長は近中尉であった。

大隊本部と第一ないし第三中隊の主力は、九月二日に二隻の輸送船に分乗して宇品を出航し、翌三日十六隻の船団を編成して門司を出港し、船団は無事高雄に廻航し、同港で一泊後、比島に向け出航し、九月二十八日最初戦隊の基地に予定されていたルソン島の北端アパリ港に着き、兵員はここに上陸して二十九日から十月二十二日まで同地付近で第五戦隊のための舟艇及び基地設営や、船舶からの揚陸作業に従事していた。

一方大隊本部の一部と、第二中隊の分乗した輸送船(？風丸)は、九月二十五日に高雄出港後機関に故障を起したため

直ちに引返し、二日後に再出航し十月八日北サンフェルナンド、ポロ港に着き、兵員はそこに上陸して十一月八日(？)まで北サンフェルナンド付近で舟艇整備と揚荷作業に従事した。



このため先のアパリ上陸の大隊主力は、再び海路で北サンフェルナンドに移動を行ない、整備中隊を除く基地大隊は、ようやく集結ができた。

そして新たに戦隊の基地に指定されたリンガエン湾で、改めて基地設定を行なうよう準備していたところ、再び基地変更の命令が出され、大隊は十一月三日北サンフェルナンドを出発して、陸路マニラを経由し、更に鉄道輸送によって同月

十四日、ルソン島の最南端に位置するアルバイ州カマリグ地区に着き、同地に駐屯して翌二十年一月十九日までアルバイ州スラ水道及び同州のリボグ付近で、舟艇秘匿基地の設営と陸戦用の陣地構築を行なっていた。

しかし戦隊は遂に比島に到着しなかった上、更に米軍がレガスピーから上陸する見込みも強くなったため、一月十九日以降二月中旬まで、野口兵团（歩兵八二旅団、指揮官野口少将）の一部隊として作戦に従事することとなり、大隊主力はアルバイ州カマリグに転進し、この地区で陸戦用の陣地構築を行なっていたが、四月以降は同地区に上陸してきた米軍（四月一日レガスピーに上陸した）と、これに合流した組織ゲリラ隊との戦闘に入った。

なお大隊の一部はアルバイ州ダラガ付近に駐屯していたが、ここでも米軍の進攻を受け戦闘を行なった。

こうして二月中旬から五月十三日までの間は、大隊主力はアルバイ州中のビリ、マバトバト等に転々とし、その地でゲリラ部隊に対する警備と、進攻してくる米軍との間で遊撃戦を行なっていたが、五月十四日にはイサログ山中に転進して、同地で守備態勢をとり、抗戦中に敗戦を

迎えた。

最終発航となった整備中隊（中隊長五艘三郎中尉が指揮）は、十月三日に宇品を出港し、十月九日に高雄に到着上陸したが、戦隊と同様に比島向けの出航は不能となったため、同じく改めて台湾軍に編入されることとなり、同様に台湾に残留していた基地第二〇大隊の一部（整備中隊？）とともに、臨時海上挺進第二〇大隊（暁第一二八九七部隊）の整備中隊となり、第二〇戦隊の整備を担当しているうち、台湾で終戦を迎えた。

大隊の被害は、比島に在島した八七六名中、戦死者は石原大隊長以下七〇二名であり、比島からの生還者は一七四名であった。

私の戦場体験記

元第五戦隊員 澤田 喜久雄

出陣式

私たちは、昭和十九年八月、小豆島での船舶兵特幹としての訓練が終わって間もなく、近くにある豊島でのテント生活が始まった。㊦（マルレと呼ばれた小舟艇）を操っての特攻攻撃の訓練のためだ。テントは松林の中にあった。豊島は綺麗な砂浜が広がっていたが、潮の満干には苦勞させられた。満潮時には、腰まで、

ずぶ濡れのまま㊦の操作だ、ついには腹の調子までが狂う始末だった。また、干潮の時には、㊦が座礁してしまつて、海に浮かべるのに苦勞しての訓練が続いた。

豊島の訓練が終了したある日、特幹隊へ入って初めての外泊帰郷が許された。いよいよ、戦地へ出発する日が近づいたと言ふことだ。故郷の事や父母の顔を思いうかべていた。

「再び帰る事は出来ないだろう」との思いを秘めながらの帰郷であった。父母には、「戦地へ行く記念に何でもいいから、樹木を植えてくれないか」と云つて家を後にした。（“勝ち栗”にちなんで植えたという栗の木の子孫が今も立っている）

集合地は広島。暫時の期間を過ごしたが、幸の浦という土地だった。船舶隊の基地だから、様々な部隊の人が慌ただしく移動していた。

陸軍の「潜水艦（マルユ艇）」が、訓練待ちか或いは物資輸送の任務を待っているのか、並んで停泊している姿を見たのもこの頃であった。マルユ艇は始めてだ。

戦地への出発準備のある日、㊦係留地の歩哨に立っていた。突然、一人の将校

が①に飛び降りた。「止めて下さい」と私は叫んだ。私の叫びを無視していたその人が、艇内に張ってある「極秘」の文字に吃驚して走り去って行った。それ程に②の行動は軍事秘密だったのだ。

私は、輸送船が宇品の港を出港するのにも、秘密裏に夜間になって出て行くものと思っていた。

戦地へ出発の日、私たち戦隊の内、一部の中隊が“陸軍の航空母艦(秋津丸)”への乗船を知らされた。私は、陸軍の船舶部隊に“航空母艦”が存在することすら知らなかった。

私達は“出港合図の銅鑼”が鳴ったら飛行甲板に集合”と、予め指示されていた。

甲板に整列した私達は東の空を仰いで「あーあーあの顔で、あの声で、手柄頼むと妻や子が、チギレル程に振った旗：．．」と歌い始めた。

私達が乗っている艦から、低く短い音で「ポッ」と云う汽笛が聞こえて、航空母艦は“静かに”“静かに”前進した。

と同時に、港に停泊している全部の船が鳴らす「ボーボー」の汽笛が耳を突いた。

夫れ夫れの船上には、出港を待っているのであらう同胞達が、一足先に戦地へ赴く私達に向かって、“手”を“ハンカチ”を振っていた。そして「頑張れー」

「頑張れよー」と叫ぶのが聞こえてくる。海上には船舶司令部か何かの旗をなびかせて走る“ランチ”があった。

「諸氏のご健闘を祈る」「諸氏のご健闘を祈る」とでも云っていたのだろうか“メガホン”を手にして呼びかける声が届いた。

「これが出陣式と言うものか」と胸を熱くしたものだ。

同じ歌を何回繰り返しただろうか、「止め」の声があった時は、東の空が暗くなっていた。遠くの山手の方に飛行機の飛ぶ音があり、空を照らす二・三条の探照灯が交差しているのが見えた。

不気味な航海の始まりであった。

連合軍艦載機の攻撃

私達は、私達が乗った航空母艦が門司港に到着すると、間もなく、戦隊主力が乗っている貨物船へ移動して合流した。

宇品港で手間暇かけての出陣式の本意は何だったのだろうか。理解が出来なかった。

船の燃料である石炭の補給を終えて三池港を出港した夜から緊張感が漂い始めた。脚を伸ばして休む事も出来ない“すし詰め”の船内生活だ。

三池港を出てから二日目位の夜だった。突然の轟音があつて、「順次、甲板に整列」との事だったが、万人(?) 近くの

全員が甲板に出られる筈が無い。船の復原力が極度に悪くなって傾いたままの不安が暫く続いた。

「敵の潜水艦影があつた」とかの話だった。こんな思いの航海が幾日か続いて、漸く台湾の高雄港に入港した。折り悪く、連合軍の機動部隊が接近している時期で、船団は大陸の“マカオ”や台湾の“澎湖島”方面へ展開する様だった。

長野県・上田市出身のA君が「私達の船は澎湖島方面へ行くそうだ。冥土の土産に澎湖島を見て置こうよ」と云う誘いもあつて、私は、警備要員を希望して船に残る事とした。

こうして、高雄港に上陸して待機する戦隊主力の皆さんと別れたのだが、船が沈没すると言う危険に遭遇するとは、夢想もしていなかった。

澎湖島の海軍軍港の近くに停泊して幾日過ぎただろうか、ある夜、対空監視の任務に就いた。一時間の勤務だったが、強い印象の残った夜だった。特に注意する方向は指示されていた。台湾本島の方向だった。

しかし、その夜の、私の目に入るものは満天の星、そして途切れる事がない“流れ星のショー”だった。私の故郷も晴れた夜には満天の星だ。流れ星もいろいろ見たものだが、その夜の流れ星は

「空が落ちてくる様な思いがする」ほどのものだった。その翌朝だったと記憶して居るのだが、甲板上で雑談をしながら朝食が始まった。

何気なく西寄りの山に目を遣ると、二、三機編隊で上下移動の速い飛行機が飛んでいた。こんな様で飛ぶ飛行機は見たことが無い。

隣には、当時はまだ数少なかった、レーダーの装置を付けた船が停泊していた。海軍の輸送艦だと云われていたが、突然その輸送艦からの銃撃音が耳を突いた。機動部隊艦載機の攻撃だ。慌てて軍装を始めた。攻撃の一番機が照明弾を投下したので、停泊している船舶は海面に浮き上がって見えるのだ。

艦載機の銃撃音、迎え撃つ船砲の音。これが戦場なんだと無我夢中だった。

轟音がした方向に目を遣ると、最初に激撃を開始した海軍の輸送艦が高い水柱を上げていた。魚雷攻撃を食らったのだ。輸送艦は「アツ」と言う間に沈没して行った。「これが轟沈と云うものか」と愕然だ。

その頃まで、私達の船で応戦していた船舶砲兵の皆さんの機関砲の音が「バツタリ」止んだのに気付いた。隊員の姿が見当たらない。

その時、私達の船に向かって、海面す

れすれに飛んでいる飛行機が目に残った。「それ撃て」なんかと言って私達は機関砲に飛びついた。暫く撃つっていると、飛行機が近づいてくる。機関砲の先を下げて撃つ。とうとう機関砲の重みを支えきれなくなった。

「魚雷」「魚雷」と、誰かが叫んだ。魚雷は船に向かって走って来る。「反対舷へ急げ」と叫ぶ声。反対の舷へ急ぎながら魚雷が外れてくれる事を願った。

しかし、願いは叶えられなかった。轟音が聞こえた瞬間、私達は甲板に叩きつけられた。続いて落ちてきた水柱が全身を叩きつけた。海軍の輸送艦が高く揚げていたが「あの水柱だ」。

「ビューン」「キイー」「シュルシュル」といろいろの音を出して機銃掃射の弾丸が飛び交っていた。

「頭を上げるな」との声が聞こえるが、「ポコポコ」「ピシャピシャ」と海水が昇って来る音も聞こえるのだ。先程見た轟沈の姿が脳裏をよぎった。

「船の下は浅いようだ、煙突が海中に沈む事は無いようだ」と船員さんが叫んでいた。しかし船は傾きながら沈んで行く。「退船命令が出ないのに退船してはいけないぞ」と誰かが海に出た人に向かって叫んでいた。

甲板上には仮設された木造の小屋が幾

つも並んでいた筈だ。私達も私物を入れた袋などを積んでいたのだが、魚雷爆裂の衝撃で小屋もろともに海に浮いてしまっていた。

父母や姉弟と並んで撮った、記念の写真が入っている私の私物袋が、目に入った。懸命に手を差し出したが届かないのだ。遠のいて行く袋を暫時見送るのが精一杯だった。

船の沈む速度が遅くなって、心に余裕が出て来た頃、「寝起きしていた船倉の様子を見てこよう」と云ってA君等と見に行った。

船倉に設置されていた二、三段の木造ベットや木造の階段は無惨な姿で水に浸っていて、三、四連の縄梯子だけが下がっていた。

「満載状態での被爆だったら」と背筋の寒い思いをしたものだ。

被爆から何分経っただろうか、私達も海上に漂う人となってしまった。

飛行機の銃撃が途絶えたので、海の中を眺めながら漂流した。海底の岩肌までが見える綺麗な海だった。

よく見ると、鮫の群が私達と並んで泳いでいるのだ。暫くは、「冷や冷や」しながら浮いていた。身体の下には、大きな亀が泳いでいた。甲羅の直径が一メートルもあるかと思われる代物だ。「船

上の銃撃戦なんか知った事か」と云って居るように悠々と去っていった。

再度の攻撃が始まったのは、私達が海軍の船艇に救助されて馬公軍港の埠頭に上がった直後だった。

海面を走る銃撃の水しぶきが次々と近づいてくる。埠頭の私達が目標なので、頭を上げる事が出来ない銃撃が続いた。

海軍の基地も破壊された様だった。「○長、やられました。私は○○県○○町の○○○○です」と叫ぶ声を耳にしたのはこの時だ。

私の脳天には、この時の思いが強烈に残って居るようで暫くの期間夢に出たのがこの時の光景だ。

攻撃の止むのを待っていたのだろうか私達が居た埠頭の近くに、四発の飛行艇が着水した。一刻も早く戦況の連絡を終えて、再び飛び立つのだろう、降り立った将校は慌てていた。しかし、磯波に脚をとられて前進出来ないのだ。埠頭に立つ基地の将校は「慌てるな」とたしなめていた。

「早く飛ばないと、次に来る攻撃をかわす事が出来ない」。緊迫した状況を感じて私達も拳を握っていた。

攻撃が終わって、私達は丘の上の宿舍に入った。今日の攻撃で、戦死した勇士の祭壇と同居の部屋だった。

遠くに見える海上には、戦場から帰還した海防艦だろうか、長い煙突から黒煙を出した四〜五艘が、早い速度で何回も何回も、繰り返して旋回していた。

もの寂しい思いのする光景だった。

紙一重の命

私達は澎湖島から高雄に移動した。

輸送船と一緒に攻撃兵器の①を失った

私達の戦隊は台湾高雄港に近い国民学校で、次の指令を待っていた。その本隊へ帰ったのだ。

当時の高雄港等は、毎日、B29の攻撃

を受けていた。その日も空襲警報が発令

されたので、皆が防空壕へ避難した。

Y・A君は「マラリヤ熱」だろうか「身

体が怠いので、部屋で過ごす」と云って

いた。

Y・A君は、祖父が石川県の能登の出身だと言って幼い頃に訪れた能登の話などを聞かせてくれた。北陸の話題を共有出来る事もあってか、割りかた意気が合

っていた。そんなY・A君が部屋に残るなら、私も残る事にしようということで、飛行機の通過を待ちながら、二人で雑談

をしていた。

「今日は真上を通過したぞ」「今日は危ないぞ」「早く防空壕へ移動せよ」と走りながら叫んで行く声が聞こえた。二人は急いでそれぞれの防空壕へ向かった。

私の壕は二人用で、新潟県の親不知出身だと云って居たH君と何時も一緒だった。

私が遅かったからか、何時も私が座る処にH君が入っていた。私は反対側に回って席に着いて間もなく、飛行機音と爆弾の落下音が耳に入った。「案の定真上だ」と思う

間もなく大きな爆発音がした。壕内が真っ暗になった。こんなことは、初めてだ。

私は「壕が埋もれたのでは」と直感したので、壕の入り口に向かって身体を押し当てた。「ほっ」と身体は外に投げ出される様に倒れた。壕の外も土煙で真っ暗だった。

幾分、正気を取り戻した時だ、「S!S!」と私を呼んでいるH君の声があるので、慌てて壕へ引き返した。「やられた。やられた。」とH君が叫んでいた。

私は、吃驚して「衛生兵」「衛生兵」と叫んだ。担当の衛生兵は走り寄って直ぐに手当をしてくれた。間もなくH君は陸軍病院へ運ばれていった。

誰かが、私の手の甲が真っ赤になっていと教えてくれた。慌てて身体を叩いた。なんとも無い、H君の血が飛びついたものだった。

H君は陸軍病院で治療の痛みもなく、帰らぬ人となってしまうた。人の生死は紙一重とよく耳にする。戦争とはいえ、悲しい体験をしたものだ。

ひたすらH君のご冥福を祈っている。

平成30年度九軍神慰霊追悼式

会員 中川法宏

「ニイタカヤマノボレ1208」
昭和16年、日米開戦を12月8日午前0時とする開戦決定の暗号である。



平成30年12月8日18時、身を切るような寒さの中、愛媛県西宇和郡伊方町三机にある須賀公園において地元三机青年団による九軍神慰霊追悼式が厳かに執り行われた。

【式次第】

- 一、開式の辞
 - 一、黙祷
 - 一、鎮魂旗並びに国旗掲揚
 - 一、修祓の儀
 - 一、降神の儀
 - 一、献饌の儀
 - 一、祝詞奏上
 - 一、献花・玉串奉奠
- 三机青年団



三机湾

- 区長、壮年会長、いわみや旅館隊友会会長及び隊員
 - 元呉総監、自衛隊OB
 - 防衛部長、自衛隊関係者
 - 県議会議員
 - 今治市議会議員
 - 愛媛県防衛協会
 - イヨヤマト乗組員
 - 伊方町遺族会 他参列者
 - 一、鎮魂旗並びに国旗後納
 - 一、昇神の儀
 - 一、閉式の辞
- この後場所を移して直会

三机は愛媛県の西部、佐田岬半島の真ん中に近い瀬戸内海に面した小さな村で、当時の町名は瀬戸町である。美しく波静かな三机湾は、湾内への船舶の航行量が少なく、また、地形上人の出入りも少ない為、秘密保持と各種訓練に最適であると、して特殊潜航艇「甲標的」の実験訓練地に選ばれた。

cmの九七式魚雷を2本搭載する二人乗りの潜航艇である。三机湾の沖、伊予灘には「甲標的」を搭載した母艦「千代田」が投錨した。訓練は海軍部内にも極秘で、操縦や魚雷発射及び「千代田」からの発進訓練、「千代田」を目標とした停泊艦襲撃訓練や航行艦襲撃訓練等が人々の寝静まった深夜に行われていた。特殊潜航艇「甲標的」に関する一切は厳重に秘匿され、乗組員はこの三机で厳しい訓練を受け、人知れず戦地に赴いてゆく。1941年11月11日「甲標的」の部隊は、正式に「特別攻撃隊」と名付けられた。「只今より行きます」昭和16年12月7日（日本時間）、オアフ島南側に接近した伊号潜水艦5隻から各1隻、合計5隻の特殊潜航艇「甲標的」が真珠湾に向けて発進した。伊22潜 岩佐直治大尉 佐々木直吉一曹
伊16潜 横山正治中尉 上田定二曹
伊18潜 古野繁実中尉 横山薫範一曹
伊20潜 広尾彰少尉 片山義雄二曹
伊24潜 酒巻和男少尉 稲垣清二曹
「甲標的」は水中速度19ノットで当時の潜水艦の2倍以上の速さを持つ。しかし航続距離は短く、操縦性も悪い。さらに

電池を使い切ってしまえば動くことはできない。出撃は「行つて参ります」ではなく「行きます」という生還を期さない「特別攻撃」だった。

12月7日、米国海軍駆逐艦「ウォード」が真珠湾入口で「甲標的」を発見。4インチ砲で攻撃し司令塔に命中させた。「甲標的」は撃沈し、2名の搭乗員が日米太平洋戦争の戦死第一号となった。(ちなみにこの「ウォード」は、きっかけ3年後の同日、レイテ島の戦いで陸軍特別攻撃隊「勤皇隊」の攻撃により沈没する)

発進した「甲標的」5隻は全て未帰還となり、1隻は座礁して拿捕された。

「甲標的」の戦果は1隻が攻撃に成功し、戦艦「ウエストバージニア」と戦艦「オクラホマ」に向けて魚雷が発射されたとされ、その内1発が命中した「オクラホマ」については甲標的によるダメージが致命的で転覆沈没したとされている。

昭和17年3月6日、九人の真珠湾での戦死が報じられた。

三机の人々は、この時初めて特殊潜航艇の訓練がここで行なわれていたことを知る。

特別攻撃隊10人の内、酒巻和男少尉は捕虜となったため1名少ない9名が「軍

神」として称えられた。

「この特殊潜航艇による真珠湾の奇襲は、日本民族の気魄を遺憾なく發揮し、敵の心胆を寒からしめ、世界を驚嘆させた。参加した特殊潜航艇乗員の英名は、全ての国民に知られ「軍神」として崇敬されたことは、あまりにも有名である。(中略)この50トン足らずの小艇に乗り、身命を賭して祖国のために戦ったそのことは、たとえ戦争に敗れたとはいえ、日本民族の護国の精神が、きわめて崇高なものとして、世界の歴史に残るであろう」

（米海軍スポークスマン）

九軍神の写真・手記等の貴重な資料は当時彼らが投宿していた「いわみや旅館」で見ることが出来る。

昭和41年、須賀公園に総理大臣・佐藤栄作の筆の大東亜戦争九軍神慰霊碑が建立された。

大東亜戦争九軍神慰霊碑碑文

「噫 殉国忠勇平和礎石ノ九軍神 昭和十六年十二月八日未明 大東亜戦争ノ先陣トシテ ハワイ真珠湾攻撃ニ挺身 決死隊第一号面目躍如 輝ク戦果ヲ挙ゲ マタ能ク我が空軍爆的ノ烽火トナリ海空 呼応壯絶無比一大緒戦ヲ展開 自ラハ従容愛艇ト運命ヲ与ニシ 壮烈湾深キ所浪ノ華ト散リ行キシ九軍神 三机湾ハ当時

日本ノ真珠湾トシテ諸勇士ノ特殊潜航艇

ガ 一心同体生死諦観決死ノ猛訓練基地トナリ 海軍ヲ泣カシメル門外不出ノ秘境デアッタ。十七年三月 九軍神ノ勲功氏名ノ発表セラルルヤ 沈黙果敢天晴レノ最期ニ驚嘆シ三机ノ人々ハ感泣シタ。

当時若桜ノ九軍神 マダガスカル・シドニー等デ散華シタ諸勇士ガ三机ニ遺シタ逸話美談ハ一斉ニ花ト咲イタ。歌書ヨリモ軍書ニ悲シ三机湾モ 今ヤ戦争ノ真珠湾カラ平和ノ真珠湾ニ衣更エ 日米ヲ真珠デ結ブ山紫水明ノ平和境トナリ觀光客モ次第二ソノ数ヲ増シツアル。九軍神ハ戦争ノ犠牲トナリ マタ平和ノ礎石トモナル 戦争放棄平和憲法治下国土平安ノ福祉国家トシテ 新生日本ハ逞シク前進スル。嗚呼芳シキカナ護国の英霊

瀬戸町有志ハ広ク浄財ヲ募ツテ軍神由緒ノ地ニ慰霊碑ヲ建立シ ソノ功績ヲ敬仰スル。九軍神ノ英霊永久ニ瞑セラレヨ。昭和四十一年八月吉日」

これ以降毎年12月8日にここで追悼式が行われている。

特筆すべきは、この追悼式の主催は地元三机の青年団だということだ。

戦後74年。昭和から平成、そして令和へ。時代は移り戦争の記憶も記録も風化しつつある。国内各地の慰霊祭は継続困

難により、次々と廃止・縮小してゆく中、この三机では次代を担う若者達が九軍神慰霊追悼式を連綿と続けている。

若い彼らは何カ月も前から仕事の合間を縫い、追悼式から直会まで全てを1から作り上げる。その為12月8日が日曜でない場合、追悼式の開始時刻は今日のように仕事が終わった後の夜のこの時間となるのだ。それでも代替の日を設定しない彼らの心意気に頼もしさと感動を禁じ得ない。

身はたとえ異境の海に はつるとも
護らでやまじ 大和皇國（みくに）を
〜岩佐直治大尉〜

出撃した若者達が守りたかった「未来」を我々は生き、三机の若者達はさらなる「未来」を共に守る。

全員の玉串奉奠が終わり、ラッパの音に合わせ鎮魂旗・国旗が後納される。

昇神の儀。英霊の皆様、三机は大丈夫です。どうかご安心ください。

風はますます強く、大気はどんどん冷えてくる。

この日、四国では初雪が降った。

駆逐艦浜風慰霊法要

会員 中川法宏

平成30年4月1日、大阪市東住吉区の日蓮宗法得寺で天一号作戦に参加した駆逐艦浜風の慰霊法要があり参加してまいりました。

浜風は陽炎型駆逐艦の13番艦として昭和16年6月に竣工、大東亜戦争では真珠湾攻撃、ミッドウェー海戦、マリアナ沖海戦、レイテ沖海戦等に参加、戦艦武蔵や空母信濃の沈没時には乗組員の救助にあたった。

天一号作戦では直撃弾一発、魚雷一本を受け、4月7日午後12時45分に沈没した。法得寺の土井兼廣住職も浜風の単装機銃員としてあの戦闘に参加している。「海に漂流してる時でも大和があるから助かると思ってた」とそう語る。

浜風の慰霊法要も過去には毎年、全国から兵士が集ったが今年は土井住職と福田吾夫水兵長の二人だけになった。艦橋にいた福田水兵長は「初霜が梯子を下ろしてくれたけど、長い時間漂流してたから力が入らんです。一番下に脚をかけたところで梯子ごと引き揚げてくれました」と当時を語った。

法得寺では月次法要のうち、毎年4月1日を浜風慰霊法要として行っている。法要は日蓮宗の式で行われるが、宗派に関係なく一般の方の参詣も歓迎とのことなので関西の方には足を運んでほしい。



「浜風会」の会旗



参詣者に当時を語る土井住職

連載 山ある記7 山梨県「国師ヶ岳」

会員 池田 康博

国師ヶ岳山頂、奥は北奥仙丈ヶ岳



期待どおりの涼しい空気の中、8時35分に峠を出発。金峰山とは反対の、甲武信ヶ岳に通じる登山道に入った。道はきれいに整備されていて、木道と木製の階段を登って行く。あたりはシラビソの樹林で地面には

八月、平地の酷暑から避難できる山に登ろうと、と、山梨県の大弛峠（おおだるみとうげ）から国師ヶ岳に登った。大弛峠は、標高二千三百m、中央自動車道の勝沼ICから43Km、約1時間30分の奥深いところにある日本一高い峠である。ここは百名山の一つ、金峰山に至る縦走コースの起点でもあるため、朝8時30分前に着いた時には約30台収容の駐車場は満杯で、仕方なく峠を越えたところの道端に駐車した。

苔も多く、北八ヶ岳の雰囲気を持っている。約30分で前国師ヶ岳を通過。更に行く

と間もなく北奥仙丈ヶ岳との分岐に着いた。北奥仙丈ヶ岳は、この登山を計画するまで知らなかったが、実は、標高が二千六百一mもある奥秩父の最高峰である。しかも“すぐそこ”であれば、寄らないわけにはいかない。右にコースを取って、9時17分に山頂に着いた。本来なら大パノラマが期待できるところだが、生憎、この日はガスがかかって時折、金峰山の山塊が見える程度であった。気を取り直



北奥仙丈ヶ岳との分岐点

ずガスはかかっていたが、丁度、写真の撮影隊もいて、モデルらしき男性がポーズをとっていた。山の雑誌のページでも飾るのだろうか。しばらく山頂の清涼な空気と周囲の景色を楽しんだ後帰途にいた。帰りは「夢の庭園」と名付けられた日本庭園風の岩と樹木の景色が楽しめる登山道を経由して大弛峠着は10時35分、所要時間は2時間の山歩きであった。国師ヶ岳は、夢窓国師の修行伝説から付けられたという奥秩父で最も奥深い山というが、大弛峠まで車で行くと、その標高差は約三百m、今や軽易に登れ、かつ、高山の感覚も楽しめる山となった。



して再び分岐に戻って国師ヶ岳に向かう。そして、樹林帯を登ると15分で、標高二千五百九十一mの国師ヶ岳山頂に着いた。相変わら

「埼玉県特攻勇士之像慰霊祭」のご案内

日時 令和元年10月31日木曜11時〜14時

場所 埼玉県護国神社境内

さいたま市大宮区高鼻町3-1-49

最寄駅 北大宮駅から徒歩約5分

行事

慰霊祭「特攻勇士之像」前

直会 社務所二階

玉串料 3千円

その他

受付は十時半より行います。

直会準備の関係上、参列希望の方は

十月二〇日までに事務局にfaxまたはE-mailにてお願いします。

連絡先

特攻隊戦没者顕彰会事務局

FAX 03-5213-4596

E-mail tokuseniken@tokkotai.or.jp

呉正男(ごまさお)さん 抑留体験

「台湾出身日本兵幻のグライダー戦隊及びカザフスタン抑留体験」

日時 8月12日(月・振休)
十四時〜(約六十分)

場所 平和祈念展示資料館(入館無料)
東京都新宿区西新宿2丁目6-1

新宿住友ビル33階

TEL 03-5323-8709

内容

台湾から東京に留学、幹部候補生としての教育を受けた後、グライダー特攻隊に配属。朝鮮北部で終戦を迎え、カザフスタンへ抑留されるという、たぐいまれな経験を語ります。

■プロフィール■

昭和2年8月、台湾斗六市生まれ。

昭和16年東京中野区の中学校に留学。

昭和19年4月、特別幹部候補生として水戸陸軍航空通信学校に入校。

12月、滑降飛行戦隊(グライダー特攻隊)に配属。

昭和20年8月、朝鮮北部の宣徳飛行場で終戦を迎える。

9月、ソ連軍に拘留され、カザフスタンのグジルオルダ収容所に抑留される。

昭和22年7月、京都府の舞鶴港に体重41kgで復員。外国人登録し日本居住。法政大学卒。



特攻文芸

短歌・俳句・川柳の部



● 耳澄ます 知覧の空の 大西日

● 純白を 一直線の 瀑布かな

● 涙痕や 星逢ふ夜の 無言館
赤とんぼ

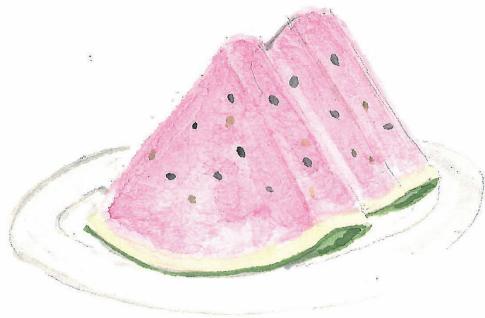
● 君がため 流るる星に 願をかけ

● 蛍灯に 君のすがたを 重ねみる
淳

● 夏空や 入道雲が 丈比べ
よみびとしらず

● 雲の峰孫台風が昼寝する

● トケイソウ咲くかな毎日水をやる
井下駄マスオ



事務局からの報告等

平成30年度 事業報告書

1 慰霊事業

(1) 第39回特攻隊全戦没者慰霊祭

平成30年3月21日(土) 11時より、靖國神社に於いて実施した。

参加者は昨年より21名増加の総員266名となり昨年(245名)を上回る参加数で英霊奉慰の誠を奉げることができた。

慰霊祭後、遊就館前に有る「特攻勇士の像」への献花を行い、引き続き、靖国会館に於いて顕彰会の状況説明及び懇親会を実施した。

(2) 第67回特攻平和観音年次法要

9月23日(日) 秋分の日午後2時より、世田谷山観音寺に於いて、同寺と地元駒繫神社とによる神仏習合による年次法要が実施され、当顕彰会は同法要に全面協力をし、整齐たる法要の実施に寄与した。参加者は、例年並みの総勢224名であり、特に問題もなく整齐と実施できた。

3) 各地慰霊祭への参列等

ア 代表者派遣(35か所)

(時期)	(慰霊祭名)	(場所)	(参列代表者)
3月21日	神雷部隊慰霊祭	鎌倉市北鎌倉	原評議員
4月4日	予科練雄飛会	靖國神社	水町理事
4月6日	都城特攻慰霊祭	宮崎県都市	石井理事
4月7日	徳之島慰霊祭	鹿児島県大島郡	小倉理事
4月7日	鹿屋特攻慰霊祭	鹿児島県鹿屋市	岩崎副理事長
4月8日	宮崎特攻基地慰霊祭	宮崎県宮崎空港横	原島評議員
4月8日	萬世特攻慰霊祭	鹿児島県南さつま市	宮本評議員
4月16日	出水市特攻慰霊祭	鹿児島県出水市	衣笠専務理事
4月22日	国分特攻基地慰霊祭	鹿児島県霧島市	長瀬評議員
4月22日	靖國神社春季例大祭	靖國神社	杉山会長
4月28日	秋田県特攻慰霊祭	秋田県秋田市	高橋会員
5月3日	知覧特攻慰霊祭	鹿児島県南九州市	鮎田理事
5月12日	福岡県特攻慰霊祭	福岡県中央区	原評議員
5月13日	特攻殉国の碑慰霊祭	長崎県川棚町	福江評議員
5月20日	若櫻の碑慰霊祭	三重県津市香良洲町	原島評議員
5月20日	豫科練戦没者慰霊祭	茨城県阿見町	石井理事
5月25日	哀惜の碑追悼慰霊式	鹿児島県指宿市	宮本評議員
5月26日	特攻勇士之像慰霊祭	千葉県千葉市	金子会員
5月27日	特攻勇士之像慰霊祭	京都府東山区	白田理事
5月27日	海軍落下傘部隊慰霊祭	千葉県館山市	衣笠専務理事

(時期) (慰霊祭名) (場所) (参列代表者)

8月15日	十三塚原特攻隊慰霊祭	鹿児島県霧島市	倉形評議員
9月2日	高野山慰霊祭	和歌山県高野町	岡部理事
10月10日	特攻勇士之像慰霊祭	長野県護國神社	水町理事
10月13日	串良基地戦没者慰霊祭	鹿児島県鹿屋市	原評議員
10月18日	秋季例大祭	靖國神社	杉山会長
10月18日	秋季慰霊祭	千鳥が淵墓苑	杉山会長
10月21日	明野忠魂塔慰霊祭	伊勢市小俣町	金子会員
10月25日	神風特攻戦没者慰霊祭	愛媛県西条市	石井理事
10月25日	神風特攻隊慰霊碑参拝	比島マバラカット	岩崎副理事長
10月28日	特攻勇士之像慰霊祭	大阪市住之江区	秋山評議員
10月31日	特攻勇士之像慰霊祭	さいたま市大宮区	福江評議員
11月6日	市ヶ谷台慰霊祭	防衛省市ヶ谷駐屯地	水町理事
11月11日	回天大津島慰霊祭	山口県周南市	福江評議員

イ 供花送達 (1か所)

(時期) (慰霊祭名) (場所)

6月10日 義烈空挺隊慰霊祭 沖縄県糸満市摩文仁

2 護國神社への「特攻勇士之像」建立 奉納事業

平成30年度は、沖縄・茨城各縣護國神社に奉納できた。また、平成31年度に向けて、宮崎縣護國神社及び三重縣護國神社との調整を進めた結果、ほぼ

31年度 奉納の確約を得た。さらに、32年度以降に向けて、北海道(旭川)、山梨、佐賀の各護國神社に対する説明を行った。この結果、平成30年度までで、全52か所護國神社に対する奉納特攻像は18体となった。平成31年度以降

も、事前調整等準備を周到にし、多くの国民が、特攻隊員に対し慰霊・顕彰の気持ちを持てるような環境作りに努力する。

3 その他の業務

広報業務では、公益紙としての機関誌・会報「特攻」118号〜122号の5ヶ号を発行し、会員・協力団体及び希望者に配布・頒布した。また、会の名称の普及、及び、若手会員の募集を狙って自衛隊向けの広報紙等に広告を出しており、その効果は徐々に表れるものと期待している。

4 会員の動向

平成30年度における新規入会者は86名、逝去等による退会が181名であり会員数は95名の減員となり、平成30年度末会員数は1676名に減少した。

会員の減少傾向は、会の年齢構成から見れば今後も厳しい状況が継続するものと思われる。平成31年度も役員等を中心として、特に若手会員の獲得を重視して募集業務に精励し会勢の挽回を期したい。

平成30年度正味財産増減計算書

平成30年1月1日から平成30年12月31日まで

(単位:円)

科 目	30年度決算	前年度決算	増 減	備 考
I 一般正味財産増減の部				
1 経常増減の部				
(1) 経常収益				
基本財産運用益	11,625,790	14,533,205	△ 2,907,415	
特定資産運用益	327,500	281,305	46,195	
受取会費	3,362,000	3,884,000	△ 522,000	
慰霊事業収益	2,453,000	2,317,524	135,476	
出版事業収益	64,040	94,330	△ 30,290	
広報事業収益	8,000	13,200	△ 5,200	
受取寄付金	5,321,108	4,047,603	1,273,505	
退職引当金取崩	0	0	0	
雑収益	10,888	206	10,682	
経常収益計	23,172,326	25,171,373	△ 1,999,047	
(2) 経常費用				
慰霊事業負担金	1,276,418	820,750	455,668	
像制作負担金	2,836,000	0	2,836,000	
発送等委託費	1,561,023	1,704,862	△ 143,839	
支払助成金	1,921,778	2,232,040	△ 310,262	
役員報酬	400,000	340,000	60,000	
給料手当	5,362,560	4,742,560	620,000	
福利厚生費	737,569	678,858	58,711	
旅費交通費	3,978,355	3,651,221	327,134	
通信運搬費	492,984	426,023	66,961	
減価償却費	2	37,278	△ 37,276	
消耗品費	729,422	950,081	△ 220,659	
印刷製本費	1,019,666	1,820,400	△ 800,734	
会議費	248,374	254,155	△ 5,781	
光熱水料費	140,798	111,792	29,006	
賃借料	2,258,832	2,276,022	△ 17,190	
諸謝金	177,106	145,000	32,106	
臨時雇賃金	336,000	0		
退職手当引当資産繰入	142,000	271,000	△ 129,000	
経常費用計	23,618,887	20,462,042	3,156,845	
評価損益等調整前経常増減額	△ 446,561	4,709,331	△ 5,155,892	
有価証券売却損益	0	64,000	△ 64,000	
基本財産等評価損益	△ 22,691,520	9,524,154	△ 32,215,674	
当期経常増減額	△ 23,138,081	14,297,485	△ 37,435,566	
2 経常外増減の部				
(1) 経常外収益				
貯蔵品資産受入	0	0	0	
資産計上	120	350	△ 230	
経常外収益計	120	350	△ 230	
(2) 経常外費用				
特攻像台座	0	0	0	
貯蔵品資産償却	93,620	250	93,370	
経常外費用計	93,620	250	93,370	
当期経常外増減額	△ 93,500	100	△ 93,600	
当期一般正味財産増減額	△ 23,231,581	14,297,585	△ 37,529,166	
一般正味財産期首残高	297,960,042	283,662,457	14,297,585	
一般正味財産期末残高	274,728,461	297,960,042	△ 23,231,581	
II 指定正味財産増減の部				
一般正味財産への振替	0	0	0	
当期指定正味財産増減額	0	0	0	
指定正味財産期首残高	0	0	0	
指定正味財産期末残高	0	0	0	
III 正味財産期末残高	274,728,461	297,960,042	△ 23,231,581	

事務局からの連絡事項

一 第六十八回特攻平和観音年次法要の

齋行について

恒例の特攻平和観音年次法要が令和元年九月二十三日（月曜・秋分の日）の午後2時から世田谷山観音寺特攻観音堂において、駒繫神社との神仏習合により齋行されます。

この年次法要の詳細につきましては、同封の「年次法要のご案内」に記載しておりますので、会員以外の方も多くの皆様方、お誘い合わせの上、ご参列賜りますようご案内申し上げます。

なお、本年次法要に参列を希望される方は、同封の「郵便払込取扱票」の出席欄に○印を付し、お布施（一名分、三千元）を払込みください。

知人等同伴される場合は、同伴者のお名前もご記入ください。

二 年会費未納入の方にお願

今年度（一月から十二月）の年会費が現時点で未納の方は、本号に同封の「郵便払込取扱票」の年会費欄に消去線が入ってなく、また、「年会費納入のお願い」も封入しています、年会費の納入方よろしくお願ひ申し上げます。

なお、年会費欄に、消去線が入っている方は既に納入済となっておりません。

三 「靖國カレンダー」の斡旋

今年度も、「英霊にこたえる会」が作成する「靖國カレンダー」を斡旋致します。チラシを同封しましたので、ご希望の方は、内容を確認の上、「郵便払込取扱票」の靖國カレンダー欄に必要部数及び金額（送料込み）を記載して申し込んでください。

ただし、発送は「英霊にこたえる会」からとなりますので、同会の都合により、お待ち頂く場合がありますのでご了承下さい。

四 住所等の変更について

現在、会報は、メール便にてお届けしています。メール便は郵便とは違い、転送もしませんし、あて先が少し違っただけでも返送され、お届けすることが出来ません。

転居された場合、地番等が変わった場合は新しい住所名を、また、同居されるようになった場合は、「○○様方」まで必要となりますので、速やかに事務局にご連絡下さいますようお願い致します。

五 内閣府認定等委員会の立入検査に

ついて

平成三十一年四月十六日（火）に、監督官庁である内閣府認定等委員会の立入検査を受検しました。内閣府から検査官2名が来所し、午前十時から午後三時三十分までの間、定款に基づいて公益事業が適正に実施されているか、公益目的事業費を含む、収支決算が公益財団としての基準を満たしているか等、細部にわたる検査が行われました。

この結果、公益財団法人としての活動並びに財産運用を含む収支は、良好な状態との評価を得ました。

会報『特攻』第124号正誤表

次のとおり誤りがありましたので、謹んで訂正し、お詫び申し上げます。

（訂正箇所）

平成30年義烈空挺隊出撃の地・玉砕の地
慰霊祭

2頁2段目 右1行

誤 熊本偕行会名誉会長 中垣秀夫氏

正 熊本偕行会会長 中垣秀夫氏

寄付者御芳名 (敬称略)

(平成31年4月1日～6月30日)

(単位千円)

- 一〇〇 吳 奈々子
- 五六 世田谷偕行会
- 四七 関 慎
- 一〇 高橋 芳幸
- 七 横川 るみこ
- 七 田中 清
- 二 河合 正
- 二 松野下 斉生
- 二 川井 孝輔
- 二 杉原 清之
- 二 平田 重夫
- 二 安河内 康彦
- 二 澤田 江里子
- 二 安藤 愿英
- 二 生峯 和代
- 二 山口 高治
- 一 早坂 正子

入会員名簿 (敬称略)

(平成31年4月1日～6月30日)

- 茨城 塚田 真理子
- 埼玉 関根 栄一
- 千葉 谷澤 誠
- 千葉 近藤 宏明
- 千葉 井本 徹
- 千葉 嶋田 敦子
- 東京 河合 正
- 東京 山崎 ふく
- 東京 内村 郁子
- 東京 高田 繁
- 東京 田邊 節子
- 東京 松田 英子
- 西村 辰夫
- 阿部 正寿
- 中村 孝也
- 横川 るみこ
- 田代 勉
- 松浦 良成
- 松岡 功
- 藤 有香
- 松山 泰之
- 大田 幸男
- 宮崎 神奈川
- 福岡 愛媛

会員訃報 (敬称略)

謹んで哀悼の誠を捧げます

- 岩手 村上 忠 (1・5・17)
- 山形 石川 三郎 (31・4・20)
- 茨城 関根 賢治 (30・9・5)
- 千葉 鉾田 太郎 (1・6・2)
- 東京 増子 康紀 (30・12)
- 東京 沼山 光洋 (31・5)
- 大穂 利武 (1・6・2)
- 神奈川 丸田 綾子 (31・3・30)
- 静岡 石原 義恕 (31・3・14)
- 奈良 清水 正一 (31・4・3)
- 高知 野田耕一郎 (29・4)



会員「入会のご案内」

「特攻隊戦没者に感謝と敬意を」

当顕彰会は、先の大戦の末期、一つしかない命を、祖国の安泰と家族や大切な人のために捧げられた特攻隊員に対し「あなた達のことは忘れません。有難うございます。感謝します。私たちも努力します。どうぞ安らかに！」を胸に、慰霊・顕彰を行う団体です。これにご賛同して頂ける方ならどなたでも会員にお迎えいたします。多くの皆様のご入会をお待ちしております。

○当顕彰会の主な事業

- ・ 特攻隊戦没者の慰霊顕彰（他団体への参加を含む）
- ・ 会報の発行等による特攻及び戦没者の伝承等
- ・ 特攻に関する資料の収集、調査、図書等の貸出講演会等の開催その他

○年会費

- ・ 一般会員 3000円
- ・ 学生会員 1000円

○ URL: <http://www.tokotai.or.jp>

QRコード



ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しては、次の点にご留意くださるようお願い致します。

- 1 原稿は、手書き、ワープロ、パソコン作成のいずれでも結構です。可能ならば、ワードファイル、又はテキストファイルで頂ければ幸いです。PDFファイルは編集の都合上お受けできません。
- 2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当顕彰会にお任せ願います。
- 3 投稿記事に関する写真がありましたら、なるべく添付して下さい。
- 4 原稿、写真等は、原則としてお返し致しません。必要な場合はその旨お書き添え下さい。
- 5 会報・機関紙、投稿記事等の送付先は、左記宛てとして下さい。
〒102-0072
東京都千代田区飯田橋一丁目5-8
東専堂ビル2階
公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会
電話 03-5213-4594
FAX 03-5213-4596
E-mail tokuseniken@tokotai.or.jp